「エルサレム会議 (1)」 使徒 15:1~5

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行(13:1~14:28) が終わった。
- (2) 教会史の中で、極めて重要な出来事が起こり始めていた。
 - ①異邦人信者とユダヤ人信者の関係は、どのようなものなのか。
 - ②異邦人信者の教会における位置は、どのようなものなのか。
- (3) 重要な出来事とは、福音の本質と教会の本質を巡る神学的議論である。
 - ①教会は、奥義である。
 - ②教会は、突如現れた。
- (4) エルサレム会議について、数回に分けて学ぶ。

2. アウトライン

- (1) ユダヤ主義者の来訪(1節)
- (2) 激しい論争 (2節)
- (3) エルサレムへの旅(3節)
- (4) エルサレムに到着(4~5節)

結論:

- 1. 福音とは何か。
- 2. 教会とは何か。

エルサレム会議について学ぶ。

- I. ユダヤ主義者の来訪(1節)
 - 1. 1節

Act 15:1 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。

- (1) ある人々とは、いわゆるユダヤ主義者である。
 - ①ガラ2:13にある「ヤコブのところから来た人々」と同じ種類の人々である。
 - ②彼らは、エルサレム教会から認定を受けて派遣されて来たわけではない。
 - ③彼らは、「正統派ユダヤ教」の守護者を自認していた人々である。
- (2) 彼らが教えた教理は、間違っていた。

- ① 救いの条件として、割礼を受けることを命じた。
- ②使 11:18 の出来事を忘れていたか、無視していたかのいずれかである。

Act 11:18 人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人に もお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。

*コルネリオの救いは、エルサレム教会によって正式に承認された。

③彼らは、アンテオケ教会が2年にわたって行った異邦人伝道の成果を無視した。

- (3)「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」
 - ①割礼の儀式の細部は、トーラーではなく口伝律法によって定義されていた。
 - ②「モーセの慣習に従って」とは、ユダヤ教の律法に従うという意味である。 *割礼は、ユダヤ教の律法に従うことの手始めである。
 - *救いも聖化も、ユダヤ教の律法を実践することによって可能となる。
 - ③パリサイ人たちは、口伝律法にはトーラーと同じ権威があると教えていた。
 - ④このような教えが、異邦人信者たちに向けられたのである。
 - *門の異邦人
 - *神を恐れる異邦人
 - *ユダヤ教とは無関係であった異邦人
 - ⑤これは、異邦人は先ずユダヤ教に改宗しないと救われないという教えである。
 - ⑥これは、パウロが伝えた神の恵みの福音とは異質なものである(使13:38~39)。

Act 13:38 ですから、兄弟たち。あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方によるということを、よく知っておいてください。

Act 13:39 モーセの律法によっては解放されることのできなかったすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。

Ⅱ. 激しい論争(2節)

1. 2節

Act 15:2 そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロと バルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うた めに、エルサレムに上ることになった。

- (1) パウロとバルナバは、彼らの誤った教えに挑戦した。
 - ①彼らの教えは、アンテオケ教会の内部に激しい亀裂をもたらすものである。
 - ②彼らの教えは、将来の異邦人伝道を妨害するものである。
- 2. ユダヤ主義者たちが誤った救済論を主張した原因は、何か。

- (1) 彼らは、ヘブル語聖書(旧約聖書)しか持っていなかった。
 - ①ガラテヤ人への手紙は、書かれたばかりであった (新約聖書の最初の書)。 *この手紙は、クリスチャンの自由 (キリストにある自由) を教えたもの。

②創17:12、14

Gen 17:12 あなたがたの中の男子はみな、代々にわたり、生まれて八日目に、割礼を受けなければならない。家で生まれたしもべも、外国人から金で買い取られたあなたの子孫ではない者も。

Gen 17:14 包皮の肉を切り捨てられていない無割礼の男、そのような者は、その民から断ち切られなければならない。わたしの契約を破ったのである。」

③出 12:48~49

Exo 12:48 もし、あなたのところに異国人が在留していて、【主】に過越のいけにえをささげようとするなら、彼の家の男子はみな割礼を受けなければならない。そうしてから、その者は、近づいてささげることができる。彼はこの国に生まれた者と同じになる。しかし無割礼の者は、だれもそれを食べてはならない。

Exo 12:49 このおしえは、この国に生まれた者にも、あなたがたの中にいる在留異国人にも同じである。」

- ④主イエスも使徒たちも、全員割礼を受けていた。
- ⑤そう考えると、異邦人に割礼を施さないのは差別的とさえ言えるのである。
- (2) 旧約聖書の預言者たちは、異邦人がエルサレムに流れてくると預言していた。 ①イザ2:2~3

Isa 2:2 終わりの日に、/【主】の家の山は、山々の頂に堅く立ち、/丘々よりもそびえ立ち、/すべての国々がそこに流れて来る。

Isa 2:3 多くの民が来て言う。/「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。/主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。/私たちはその小道を歩もう。」/それは、シオンからみおしえが出、/エルサレムから【主】のことばが出るからだ。

②ゼカ8:23

Zec 8:23 万軍の【主】はこう仰せられる。「その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が、ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちもあなたがたといっしょに行きたい。神があなたがたとともにおられる、と聞いたからだ』と言う。」

- ③これらの預言が、異邦人が大量にユダヤ教に改宗したときに成就すると考えて も非論理的とは言えない。
- ④しかし、これらの預言は、終末的な神の国の成就を預言したものである。
- ⑤神の計画を体系的に理解するのは、容易なことではなかった。

- (3) 異邦人信者が急速に増加するのは、ユダヤ人信者にとっては脅威と見なされた。
 - ①異邦人信者の教会への加入は、教会の純粋性を破壊する可能性がある。 *異邦人信者は、トーラーに無知であり、偶像礼拝の背景を持っている。
 - ②異邦人信者が増えると、ユダヤ人伝道が難しくなる。
 - ③異邦人信者は、口伝律法を守るという条件で、教会に受け入れるべきである。
- 3. アンテオケ教会は、エルサレムに代表団を派遣した。
 - (1) この重要な神学的テーマに関して、正式かつ最終的に結論を出そうとした。
 - ①パウロ、バルナバ、その他数人が、代表団としてエルサレムに派遣された。
 - ②話す相手は、エルサレムの使徒たちと長老たちである。

Ⅲ. エルサレムへの旅(3節)

3. 3節

Act 15:3 彼らは教会の人々に見送られ、フェニキヤとサマリヤを通る道々で、異邦人の改宗のことを詳しく話したので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。

- (1) エルサレムへの涂上、彼らはフェニキアとサマリヤを通過した。
 - ①フェニキアは、異邦人の地域である。
 - ②サマリヤは、サマリヤ人の地域である。
 - ③それらの地区にあった教会を訪問し、第一次伝道旅行の証しをした。
 - ④その証しは、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。
 - ⑤異邦人信者とサマリヤ人信者は、救われる異邦人の増加をすなおに喜んだ。

(2) 訳語の比較

「道々で、邦人の改宗のことを詳しく話したので、すべての兄弟たちに大きな喜びを もたらした」(新改訳)

「道々、異邦人の回心について詳しく伝えたので、すべての兄弟たちに大きな喜びを もたらした」(新改訳 2017)

「道すがら、兄弟たちに異邦人が改宗した次第を詳しく伝え、皆を大いに喜ばせた」 (新共同訳)

「道すがら、異邦人たちの改宗の模様をくわしく説明し、すべての兄弟たちを大いに 喜ばせた」(口語訳)

①証しの内容は「異邦人の回心」(the conversion of the Gentiles) である。

Ⅳ. エルサレムに到着(4~5節)

1. 4節

Act 15:4 エルサレムに着くと、彼らは教会と使徒たちと長老たちに迎えられ、神が彼らとともにいて行われたことを、みなに報告した。

- (1) 代表団は、エルサレム教会から歓迎された。
 - ①使徒たち
 - ②長老たち
 - ③教会全体
- (2) 代表団は、みなに報告した。
 - ①「神が彼らとともにいて行われたこと」
 - ②これは、第一次伝道旅行の報告である。
 - ③異邦人は、恵みと信仰のみによって救われるという報告である。

2. 5節

Act 15:5 しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである」と言った。

- (1) 教会全体に開かれた集会が開催されていたのであろう。
 - ①ユダヤ主義者たちが、サウロとバルナバの報告に反論した。
 - *彼らは、「パリサイ派の者で信者になった人々」である。
 - *つまり、イエスを信じたパリサイ人たちである。
 - ②かつてのパウロもまた、パリサイ派であったので、彼らの気持ちはよく分かる。
- (2) 彼らの主張
 - ① 救いのために割礼を受けさせるべきである。
 - ②聖化のためにモーセの律法を守るべきである。

結論:2つの重要な真理が攻撃を受けている。

- 1. 福音とは何か。
 - (1) 福音は、「神の恵みの福音」である。
 - ①神は御子イエスを犠牲にし、救いの道を開いてくださった。
 - ②人間は、主イエスを救い主として受け入れるだけで救われる。
 - ③救いに関して、人間にできることはない。

- (2) 福音に何かを付け足したなら、それは「神の恵みの福音」ではなくなる。
 - ①福音に少し異質なものが加わったということではない。
 - ②それは、「別の福音」である。つまり、福音ではないということである。
 - ③悪魔が神の働きを妨害するために用いる常套手段は、「嘘」である。

2. 教会とは何か。

- (1) 教会は、ユダヤ人信者からなる組織なのか。
 - ①ユダヤ人信者は、レムナント(残れる者)と呼ばれる。
- (2) あるいは、教会は新しく造られた組織なのか。
 - ①ユダヤ人の中から呼び出されたユダヤ人の聖徒たち
 - ②異邦人の中から呼び出された異邦人の聖徒たち
 - ③両者がキリストにあって「新しいひとりの人」を形成する。
 - ④エペ2:14~16

Eph 2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

Eph 2:15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

Eph 2:16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。 敵意は十字架によって葬り去られました。

「エルサレム会議 (2)」 使徒 15:6~12

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行で多くの異邦人が救われた。
- (2) ユダヤ主義者がアンテオケに来て、割礼を受けなければ救われないと教えた。
- (3) パウロとバルナバは、その教えに激しく反論した。
- (4) 最終的には、エルサレム教会において使徒たちを交えて議論することになった。
 - ①異邦人は、先ずユダヤ教に改宗する必要があるのか。
 - ②あるいは、信仰と恵みによって異邦人のままで救われるのか。
- (5) エルサレムに着くと、アンテオケ教会からの使節団は歓迎された。
 - (1)パウロとバルナバは、第一次伝道旅行の証しをした。
 - ②ユダヤ主義者たちは、激しく反論した。
- (6) この問題を議論するために、エルサレム会議が召集された。

2. アウトライン

- (1) 会議の開催 (6~7節 a)
- (2) ペテロの発言 (7b~11節)
- (3) パウロとバルナバの発言(12節)

結論:

- (1) ペテロとパウロの福音理解
- (2) 新しい契約
- (3) キリストのくびき

エルサレム会議について学ぶ。

- I. 会議の開催 (6~7 節 a)
 - 1. 6節

Act 15:6 そこで使徒たちと長老たちは、この問題を検討するために集まった。

- (1) 参加者の顔ぶれ
 - ①パウロとバルナバを中心としたアンテオケ教会からの使節団
 - ②ペテロ、イエスの弟のヤコブ、その他の使徒たち、長老たち
- (2) この会議は、教会全体に開かれていた。

①使 15:12

Act 15:12 すると、全会衆は沈黙してしまった。そして、バルナバとパウロが、彼らを通して神が異邦人の間で行われたしるしと不思議なわざについて話すのに、耳を傾けた。

②彼らは、この問題がいかに重要なものであるかを知っていた。

2. 7節a

Act 15:7a 激しい論争があって後、

- (1) どれくらいの時間が経過したかは分からない。
 - ①時間の長さは問題ではない。
 - ②両者が自分の意見を十分に述べあったということである。
- (2) 訳文の比較

「激しい論争があって後、」(新改訳)

「多くの論争があった後、」(新改訳 2017)

「議論を重ねた後、」(新共同訳)

「激しい争論があった後、」(口語訳)

「多くの議論ありし後、」(文語訳)

[And when there had been much disputing,] (KJV)

[And when there had been much questioning,] (ASV)

- ①ここでのポイントは、論争の激しさではなく、議論を尽くしたことにある。
- ②つまり、ユダヤ主義者に十分な発言の機会が与えられたということである。

Ⅱ. ペテロの発言 (7b~11節)

1. 7節 b

Act 15:7b ペテロが立ち上がって言った。「兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。

- (1) 議論が一段落すると、ペテロが立ち上がった。
 - ①ここまでペテロが待っていたのは、奇跡的なことである。
 - *彼は、最初から結論が決まっていたというような印象を与えたくなかった。
 - ②ペテロは、コルネリオの救いについて話し始めた。
 - *この話は、出席していた人たち全員が知っていたことである。
 - *コルネリオの救いについて、エルサレム教会内に大きな議論があった。
 - *ルカは、その説明に多くのスペースを割いた(使10:24~11:18)。

*この時にペテロを批判したのもまた、ユダヤ主義者たちであった。

- (2) ペテロの話のポイント
 - ①異邦人の救いは神から出たことである。
 - ②そのために、私 (ペテロ) が用いられた。 *ペテロには、御国の鍵が与えられていた。彼には、その自覚があった。
 - ③異邦人の救いは、アンテオケ教会から出たアイデアではない。
 - ④それは、エルサレム教会のリーダーであるペテロを通して実現したものである。
 - ⑤「初めのころ」。異邦人の救いは、今に始まったことではない。*コルネリオの救いは、かなり前(約10年前)に起こったことである。*その時も、ユダヤ主義者たちは反対した。

2. 8~9節

Act 15:8 そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦 人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、

Act 15:9 私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。

- (1) 神は、人の心の中を知っておられる。
 - ①ギリシア語で「カルディオグノウテイス」である。
 - ②神が人を救うとき、その判断には誤りがない。
- (2) 神が人を救ったというしるしは、聖霊のバプテスマである。
 - ①使2章で、ユダヤ人たちは異言を伴う聖霊のバプテスマを体験した。 *その結果、教会が誕生した。
 - *聖霊のバプテスマとは、信者がキリストの教会に加えられることである。
 - ②使 10 章で、異邦人たちも異言を伴う聖霊のバプテスマを体験した。

*使 10:44~46a

Act 10:44 ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。

Act 10:45 割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。

Act 10:46 彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。

- (3) 聖霊の内住は、神の子とされていることのしるしである。
 - ①これは、パウロの教えと合致している。

*ガラ4:6

Gal 4:6 そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。

*ロマ8:9

Rom 8:9 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

- (4) 恵みと信仰による救いは、ユダヤ人であっても異邦人であっても変わらない。
 - ①ユダヤ人と異邦人の間になんの差別(分けへだて)もない。
 - ②コルネリオの救いに続く議論を通して、エルサレム教会はこれを認めていた。
 - ③異邦人たちは、儀式ではなく、信仰によってきよめられた。

3. 10~11 節

Act 15:10 それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの父祖たちも私たちも負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。

Act 15:11 私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」

- (1) ペテロは、ユダヤ主義者たちの主張の問題点を指摘する。
 - ①トーラーは、信者の肩に重くのしかかる「くびき」である。
 - ②それは、「私たちの父祖たちも私たちも負いきれなかった」ものである。
 - *トーラーのすべてを実行できる人はいない。
 - *一点でも違反すれば、律法全体に違反したことになる。
 - *口伝律法は、モーセの律法の拡大解釈であり、さらに複雑になっている。
 - ③異邦人に割礼や口伝律法を強要することは、「くびき」を負わせることである。
- (2) ユダヤ主義者たちの主張は、神を試みようとすることである。
 - ①ギリシア語で「ペイラゾウ」である。
 - ②使5:9にあるサッピラに対するペテロの言葉

Act 5:9 そこで、ペテロは彼女に言った。「どうしてあなたがたは心を合わせて、主の御霊を 試みたのですか。見なさい、あなたの夫を葬った者たちが、戸口に来ていて、あなたをも運び 出します。」

- ③神は、恵みと信仰によって異邦人を救われた。
- ④今回は、神は間違っていると考えるのは神を試みることである。
 - *神の判断に逆らうのは、神の権威に挑戦し、神を試みることになる。

- (3) ペテロは、自分たちが救われたのと同じ方法で異邦人も救われたと主張した。
 - ①これは、異邦人にとって律法からの解放宣言となった。
 - ②この発言が、ペテロが使徒の働きに登場する最後となった。
 - *御国の鍵を預かる役割がいかに重要であるかが明らかになった。
 - *異邦人が異言を伴う聖霊のバプテスマを体験したことがいかに大切であるかが明らかになった。
 - *ペテロの貢献によって、異邦人のための使徒パウロは、働きを継続できた。

Ⅲ. パウロとバルナバの発言(12節)

1. 12 節

Act 15:12 すると、全会衆は沈黙してしまった。そして、バルナバとパウロが、彼らを通して神が異邦人の間で行われたしるしと不思議なわざについて話すのに、耳を傾けた。

- (1) ペテロの最終的な発言によって、全会衆は沈黙した。
 - ①これ以上議論することがなくなった。
- (2) バルナバの名が先に出ている。エルサレム教会では彼の知名度の方が高かった。
 - ①彼らは、第一次伝道旅行の証しをした。
 - ②神は彼らを通して、異邦人の間で多くのしるしと不思議を行われた。
 - ③神が無条件の救いを認めていないとしたら、このようなことは起こらなかった。

結論:

- 1. ペテロとパウロの福音理解
 - (1) ペテロは、ユダヤ人も異邦人も恵みと信仰によって救われると主張した。 ①異邦人の家に行くことさえ躊躇したペテロが、福音を理解するようになった。
 - (2) パウロも、恵みと信仰による救いを教えた。

①エペ2:8

Eph 2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

②ガラ3:2

Gal 3:2 ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、 律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。

(3) 両者の見解が一致している理由は、同じところから啓示が来ているからである。

2. 新しい契約

- (1) ペテロは、トーラー (シナイ契約) を「くびき」と呼んだ。
 - ①これは、ラビ的ユダヤ教の伝統的な用語である。
 - ②それが与えられた当初から、そのすべて行うことは不可能であった。
 - ③トーラーは、負いきれない「くびき」である。
- (2) パウロも「くびき」という言葉を使っている。

①ガラ5:1

Gal 5:1 キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、 あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。

(3) それゆえ、シナイ契約に代わる新しい契約が必要になった。

①エレ31:31~33

Jer 31:31 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。

Jer 31:32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——【主】の御告げ——

Jer 31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

②ルカ 22:20

Luk 22:20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。

3. キリストのくびき

①信者は古いくびきから解放され、新しいくびきを負うようになった。

②マタ 23:4

Mat 23:4 また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとは しません。

③マタ 11:28~30

Mat 11:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたし があなたがたを休ませてあげます。

Mat 11:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

Mat 11:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

「エルサレム会議 (3)」 使徒 15:13~21

- 1. はじめに
 - (1) エルサレム会議が開催された。
 - ①異邦人は、先ずユダヤ教に改宗する必要があるのか。
 - ②あるいは、信仰と恵みによって異邦人のままで救われるのか。
 - (2) これまでの会議の議事進行
 - ①双方が意見を述べ、議論を重ねた。
 - ②ペテロが、コルネリオの救いに関して証言した。
 - ③パウロとバルナバが第一次伝道旅行について証言した。
 - (3) 最後に、ヤコブが発言する。
- 2. アウトライン
 - (1) ペテロの説明への言及(13~14節)
 - (2) 預言書からの引用 (15~19節)
 - (3) 4つの禁止令の提案(20~21節)

結論:アモ9:11~12の解釈(使15:16~18)

エルサレム会議について学ぶ。

- Ⅰ. ペテロの説明への言及(13~14節)
 - 1. 13 節

Act 15:13 ふたりが話し終えると、ヤコブがこう言った。「兄弟たち。私の言うことを聞いてください。

- (1) この論争に関係した人たちがすべて意見を述べ、これ以上言うことがなくなった。
 - ①結論を出す段階になった。
 - ②議長であるヤコブがまとめの発言をする番になった。
- (2) ヤコブとは誰か。
 - ①彼は、イエスの異父弟である。母親が同じ (マリア)。

 *なんの説明もなしにヤコブという名が出て来る。

 *誰もがヤコブのことをよく知っていた。説明の必要がない。
 - ②彼は、イエスの公生涯の間は不信者であった。
 - ③復活のイエスに出会って、信者になった(1コリ15:7)。

1Co 15:7 その後、キリストはヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れました。

- ④ヤコブは、18年間エルサレム教会の監督を務めた(44~62年)。
 - *使徒たちはそれぞれ宣教地に散って行ったので、ヤコブが重責を負った。
- ⑤教会史の伝承では、彼は「義人ヤコブ」と呼ばれている。
- ⑥また、彼の膝はラクダの膝のように堅くなっていた(祈りのために)とされる。
- ⑦彼は、ヤコブの手紙の著者である。
 - *トーラーを大切にした。
 - *信仰には行動が伴うということを強調した。
 - *ヤコブの手紙は、イエスの「山上の垂訓」を思い出させる(マタ5~7章)。
- ⑧ヤコブが用いているギリシア語は、洗練されている。
 - *ガリラヤの労働者の一般的な教育水準以上のものを感じさせる。
 - *ギリシア・ローマ風文化のガリラヤ地方への影響が見直されている。
- ⑨彼は、人々から非常に信頼されていた。
- ⑩ヤコブは、聴衆が耳を傾けてくれるように要請した。

2. 14 節

Act 15:14 神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民を お召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。

- (1) ヤコブは、ペテロが先程行った説明に言及する。
 - ①ヤコブはペテロを「**シメオン**」というアラム語 (ヘブル名はシモン) で呼んだ。 *ペテロのユダヤ性を強調している。
 - *親愛の情を表現している。
 - ②「初めに」という言葉は重要である。
 - *バルナバとパウロが最初に異邦人伝道を行ったわけではない。
 - *神が異邦人を救われた。そのために、ペテロが用いられた。
 - ③第一次伝道旅行の前から、異邦人の救いの問題は解決されていた。

(2) 訳文の比較

「その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは」(新改訳) 「彼らの中から御名のために民をお召しになったかについては」(新改訳 2017) 「異邦人の中から御自分の名を信じる民を選び出そうとなさった次第については」 (新共同訳)

「その中から御名を負う民を選び出された次第は」(口語訳)

「その中より御名を負ふべき民を取り給ひしことを」(文語訳)

to take out of them a people for his name. (KJV, ASV)

- ① 「a people for his name」とは、かつてはイスラエルの民だけを指した。
- ②神が主導権を取って、異邦人伝道を行われた。
- ③神は、ユダヤ人だけでなく、異邦人の中からも、残れる者を呼び出された。 *これが、新約聖書が教える教会の姿である(エペ2:11~22、3:6)。 *ユダヤ人信者と異邦人信者は、キリストにあって対等な関係にある。
- (3) 人間の体験は、聖書に照らしてその正当性を吟味する必要がある。
 - ①エルサレム会議は、聖書的裏付けを必要とした。
 - ②そこでヤコブは、旧約聖書の預言を引用し、結論を出す。

Ⅱ. 預言書からの引用(15~19節)

1. 15 節

Act 15:15 預言者たちのことばもこれと一致しており、それにはこう書いてあります。

- (1) 旧約預言は、異邦人がユダヤ教とは無関係に救われることを預言している。
 - ① 「**預言者たちのことば**」と複数形になっている。
 - ②アモス書がその代表例として引用されている。
 - ③12 の小預言書のどこにも、異邦人はユダヤ人にならないと救われないとは書かれていない。

2. 16~18 節

Act 15:16 『この後、わたしは帰って来て、/倒れたダビデの幕屋を建て直す。/すなわち、 廃墟と化した幕屋を建て直し、/それを元どおりにする。

Act 15:17 それは、残った人々、すなわち、/わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、/主を 求めるようになるためである。

Act 15:18 大昔からこれらのことを知らせておられる主が、/こう言われる。』

- (1) これは、アモ9:11~12からの引用である。
 - ①ヤコブのアモス書からの引用はかなり恣意的であるという批判がある。 *彼は、七十人訳聖書から引用している。しかも、言葉を微妙に変えている。 *「エドムの残りの者」が「残った人々」になっている。
 - ②しかし、ヤコブはヘブル語聖書から正確に引用している可能性が高い。
 *ヘブル語では、エドムとアダムは同一の言葉(子音3文字)である。
 *エドムという読みは、後代に母音(ニクダー)を付けて決まったもの。
 *死海写本の中に、全く同じ引用文が出て来る(ロングネッカーの指摘)。
 - ③引用法を問題にするよりも、アモ9:11~12の本来の意味を考えた方がよい。

(2) アモ9:11~12の意味

Amo 9:11 その日、わたしは/ダビデの倒れている仮庵を起こし、/その破れを繕い、その廃墟を復興し、/昔の日のようにこれを建て直す。

Amo 9:12 これは彼らが、エドムの残りの者と、/わたしの名がつけられた/すべての国々を手に入れるためだ。/---これをなされる【主】の御告げ---

- ①「この後」(その日)とは、大患難時代の後の時代である。
- ②「倒れたダビデの幕屋」は、誤訳である。「幕屋」ではなく「仮庵」である。
- ③「**ダビデの仮庵**」とは、ダビデ王国を意味する比喩的表現である。 *2 列 25:7 で、ダビデの仮庵は倒れた。

2Ki 25:7 彼らはゼデキヤの子らを彼の目の前で虐殺した。王はゼデキヤの目をつぶし、彼を 青銅の足かせにつないで、バビロンへ連れて行った。

- ④ 「**幕屋を建て直し、それを元どおりにする**」は、ダビデ王国の回復を意味する。
- ⑤ダビデ王国が回復されるのは、メシア的王国においてである。
- ⑥メシア的王国においては、主を求める異邦人が多く存在する。
- (3) ヤコブの論点の整理
 - ①最初にペテロが経験した異邦人の救いは、聖書で預言されていたことである。
 - ②アモス書は、メシア的王国におけるダビデ王国の回復を預言している。
 - ③メシア的王国が地上に成就した時、異邦人の信者が多く存在することになる。
 - ④アモスは、異邦人は異邦人のままで救われると預言している。
 - ⑤それなら、メシア的王国が成就する前から異邦人が救われてもおかしくはない。
 - ⑥異邦人も救われることは、昔からの神の計画である。

3. 19節

Act 15:19 そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。

- (1) ユダヤ人信者は、異邦人信者に割礼を要求してはならない。
 - ①異邦人もまた、恵みと信仰によって救われる。
 - ②これは、ペテロの体験であり、聖書の教えでもある。
- (2) これで教理的な問題は解決した。
 - ①ユダヤ人信者と異邦人信者の関係をどうするかという現実問題が残っている。

Ⅲ. 4つの禁止令の提案(20~21節)

1. 20節

Act 15:20 ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。

- (1) 4つの禁止令
 - ①非常に現実的な内容の禁止令である。
 - ②4つの内、3つまでが食物に関することである。 *食事の席でのユダヤ人と異邦人の交わりを想定している。
 - ③これらの禁止令は、普遍的な命令ではない。*ユダヤ人信者と交流がある場合に、実行すべき禁止令である。
 - ④背景にあるのは、在留異国人に対する命令である(レビ記17~18章)。
- (2) 1番目の禁止令:「偶像に供えて汚れた物」
 - ①ユダヤ人信者のことを配慮し、偶像に供えられた肉は避ける。
 - ②パウロが教えるキリスト者の自由は、この禁止令とは調和しない。 *ロマ 14:20

Rom 14:20 食べ物のことで神のみわざを破壊してはいけません。すべての物はきよいのです。 しかし、それを食べて人につまずきを与えるような人の場合は、悪いのです。

- ③この禁止令は、特定の状況下で実行すべきものである。
- (2) 2番目の禁止令:「不品行」
 - ①唯一、食物に関係のない禁止令である。
 - ②不品行とは「ポルネイア」であり、幅広い言葉である。
 - *これは、性的罪のことではない。
 - *性的罪が常に悪であることは、改めて言うまでもない。
 - *ここでの不品行とは、レビ18:6~18にある近親婚のことであろう。
- (3) 3番目の禁止令:「絞め殺した物」
 - ①絞め殺した物とは、血抜きをしていない物である(レビ17:13)。
- (4) 4番目の禁止令:「血」
 - ①血を飲むこともユダヤ人にとっては忌むべきことである(レビ17:10~11)。
 - ②これもまた、彼らに不快感を与えないようにするために、避けるべきである。
- (5) ヤコブは、本質的な点では妥協しなかった。
 - ①そうでない部分においては、相手の立場を尊重するように勧めた。

- ②教会の中に分裂が起こらないようにした。
- ③4つの禁止令は、使徒の働きの中で3回も出て来る(15:20、15:29、21:25)。

2. 21 節

Act 15:21 昔から、町ごとにモーセの律法を宣べる者がいて、それが安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」

- (1) 多くの町には、会堂があり、そこでモーセの律法が教えられていた。
 - ①ユダヤ人たちは、モーセの律法の内容をよく知っていた。
 - ②教会の中にユダヤ人信者がいる場合は、彼らの感じ方に配慮すべきである。

結論:

1. アモ9:11~12の解釈(使15:16~18)

Act 15:16 『この後、わたしは帰って来て、/倒れたダビデの幕屋を建て直す。/すなわち、 廃墟と化した幕屋を建て直し、/それを元どおりにする。

Act 15:17 それは、残った人々、すなわち、/わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、/主を 求めるようになるためである。

Act 15:18 大昔からこれらのことを知らせておられる主が、/こう言われる。』

- (1) これは、ダビデの礼拝の回復の預言ではない。
 - ①そう解釈する人たちは、礼拝における踊りと賛美を強調する。
 - ②踊りも賛美も重要ではあるが、この預言とは無関係である。
 - ③「ダビデの幕屋」が誤訳であることに注意しよう。
 - ④正しくは「ダビデの仮庵」であり、ダビデ王国の比喩的表現である。
- (2) これは、教会の誕生の預言ではない。
 - ①無千年王国説では、これを教会誕生の預言と解釈する。
 - ②しかし教会は、奥義である(旧約聖書には預言されていない)。
 - ③アモス書は、イスラエルの民に関する預言である。
 - ④ヤコブは、アモ9:11~12が今教会において成就したとは言っていない。
- (3) これは、ダビデ王国の回復の預言である。
 - ①ダビデ王国の回復は、ダビデ契約の成就である(2サム7:12~16)。
 - ②この預言が成就するのは、千年王国においてである。
 - ③その時、救われた異邦人たちもそこにいる。
 - ④彼らは、ユダヤ教とは無関係に救われる。

「エルサレム会議 (4)」 使徒 15:22~35

1. はじめに

- (1) エルサレム会議のテーマ
 - ①異邦人は、先ずユダヤ教に改宗する必要があるのか。
 - ②あるいは、信仰と恵みによって異邦人のままで救われるのか。
- (2) これまでの会議の議事進行
 - ①双方が意見を述べ、議論を重ねた。
 - ②ペテロが、コルネリオの救いに関して証言した。
 - ③パウロとバルナバが第一次伝道旅行について証言した。
 - ④ヤコブがアモス書を引用し、異邦人も信仰と恵みによって救われると論じた。
 - ⑤ヤコブは、異邦人信者が配慮すべき4つの禁止令を提案した。
- (3) エルサレム会議は、教会史の中で最も重要な会議である。
 - ①この会議での決定が、それ以降の教会の発展に大きな影響を与えた。

2. アウトライン

- (1) 書簡を届ける人々(22節)
- (2) 書簡の内容 (23~29節)
- (3) 書簡を受け取った人々 (30~35節)

結論:エルサレム会議の意義

エルサレム会議について学ぶ。

- I. 書簡を届ける人々(22節)
 - 1. 22 節

Act 15:22 そこで使徒たちと長老たち、また、全教会もともに、彼らの中から人を選んで、パウロやバルナバといっしょにアンテオケへ送ることを決議した。選ばれたのは兄弟たちの中の指導者たちで、バルサバと呼ばれるユダおよびシラスであった。

- (1) エルサレム教会は、代表団をアンテオケ教会に派遣することにした。
 - ①エルサレム会議の結論が出たので、それを伝えるための代表団である。
 - ②派遣されたのは、2人のユダヤ人信者(エルサレム教会の指導者たち)である。
 - ③彼らは、手紙に書かれた内容が真実であることを証言する証人となる。 *当時は、一般的に言葉による証言の方がより信頼された。
 - ④エルサレム会議での決議は、教会史の中で最も重要なものである。

*彼らは、自分たちにとって不利になるかもしれない異邦人伝道を認めた。

- (2) バルサバと呼ばれるユダ
 - ①「バルサバ」は「安息日の息子」という意味である。
 - ②彼は、預言者であった(使15:32)。
 - ③使1:23に、「バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフ」が登場する。

Act 1:23 そこで、彼らは、バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立てた。

- ④バルサバは、「バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフ」の弟かもしれない。
- ⑤彼は、エルサレム教会の中のヘブル語を話すユダヤ人信者の代表である。

(3) シラス

- ①パウロと同じように、ローマの市民権を持っていた(使16:37)。
- ②ラテン名は、シルワノである。
- ③彼もバルサバと同じように、エルサレム教会の指導者であり、預言者であった。
- ④彼は、エルサレム教会の中のギリシア語を話すユダヤ人信者の代表である。
- ⑤ルカは、後に重要な役割を果たす人物を自然な流れの中で紹介する。
- ⑥シラスは、第二次伝道旅行でパウロの同労者として活躍するようになる。

*2 J J 1:19

2Co 1:19 私たち、すなわち、私とシルワノとテモテとが、あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり」と同時に「否」であるような方ではありません。この方には「しかり」だけがあるのです。

*****1 テサ1:1

1Th 1:1 パウロ、シルワノ、テモテから、父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。 恵みと平安があなたがたの上にありますように。

*2 テサ1:1

2Th 1:1 パウロ、シルワノ、テモテから、私たちの父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。

2Th 1:2 父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

⑦シラスは、ペテロの書記でもあった。

*1ペテ5:12

1Pe 5:12 私の認めている忠実な兄弟シルワノによって、私はここに簡潔に書き送り、勧めをし、これが神の真の恵みであることをあかししました。この恵みの中に、しっかりと立っていなさい。

Ⅱ.書簡の内容(23b~29節)

1. 23 節

Act 15:23 彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。「兄弟である使徒および長老たちは、 アンテオケ、シリヤ、キリキヤにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつをいたします。

- (1) 書簡の宛先
 - ①アンテオケ、シリア、キリキヤ
 - ②キリキヤは、シリアの西側の地区である。
 - ③紀元72年までローマは、シリアとキリキヤを1つの州としていた。
 - ④教会はアンテオケだけでなく、シリアとキリキヤにも存在していた。
 - ⑤ルカは、シリアとキリキヤでの伝道については何も記録していない。

2. 24~25 節

Act 15:24 私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱したことを聞きました。 Act 15:25 そこで、私たちは人々を選び、私たちの愛するバルナバおよびパウロといっしょに、あなたがたのところへ送ることに衆議一決しました。

- (1) ユダヤ主義者たちの教えを否定した。
 - ①彼らは、非公認の教師たちである。
 - ②彼らは、「あなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱した」。
 - ③彼らは、救われるためには割礼を受ける必要があると教えた。
- (2) 正式な代表団をエルサレム教会から派遣することにした。
 - ①バルナバとパウロに対する敬意
 - *「私たちの愛するバルナバおよびパウロ」

*バルナバとパウロが使徒であることは、エルサレム教会が認めていた。

- ②バルナバとパウロといっしょに、代表団を派遣する。
- ③彼らは、エルサレム会議において全会一致で決まったことを伝える。

3. 26~27 節

Act 15:26 このバルナバとパウロは、私たちの主イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人たちです。

Act 15:27 こういうわけで、私たちはユダとシラスを送りました。彼らは口頭で同じ趣旨の ことを伝えるはずです。

- ①「私たちの主イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人たち」 *これは、バルナバとサウロのことか、あるいは、ユダとシラスのことか。
- ② (新改訳) は、「バルナバとパウロ」という名前を入れている。
- ③ (リビングバイブル) の訳が参考になる。

「代表のユダとシラスは、主イエス・キリストのために、いのちを危険にさらしてきた人たちです」

- ④エルサレム教会は、最高の人材を派遣している。
- ⑤彼らは、口頭で手紙の内容と同じ趣旨のことを伝えるはずである。
- ⑥申 19:15

Deu 19:15 どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。

4. 28~29 節

Act 15:28 聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷 も負わせないことを決めました。

Act 15:29 すなわち、偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けることです。これらのことを注意深く避けていれば、それで結構です。以上。」

- (1) 全会一致の決定を導いたのは、聖霊である。
 - ①異邦人の救いに「重荷」は必要ではない。
 - ②つまり、異邦人は救われるためにユダヤ教に改宗する必要はないということ。
- (2) ただし、ユダヤ人信者への配慮として、以下の4つを避けるように。
 - ①偶像に供えた物
 - (2)<u>f</u>ff
 - ③絞め殺した物
 - ④不品行
- (3) 手紙の最後は、「以上」ではおかしい。
 - ①ギリシア語の「エロウステ」は、「Farewell」である(常套句)。
 - ②「祝福を祈ります」(新改訳 2017)
 - ③「健康を祈ります」(新共同訳)
 - ④「なんぢら健(すこや)かなれ」(文語訳)

Ⅲ. 書簡を受け取った人々(30~35節)

1. 30~31 節

Act 15:30 さて、一行は送り出されて、アンテオケに下り、教会の人々を集めて、手紙を手渡した。

Act 15:31 それを読んだ人々は、その励ましによって喜んだ。

- (1) 一行はアンテオケに着き、教会全体が集まる集会を開催した。 ①手紙を読んだとは、公の場での朗読のことである。
- (2) 手紙の内容を理解した人たちは、喜んだ。
 - ①そこには、励ましの言葉があった。
 - ②異邦人は恵みと信仰のみによって救われるという公の決定があった。
- 2. 32~33 節

Act 15:32 ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、 また力づけた。

Act 15:33 彼らは、しばらく滞在して後、兄弟たちの平安のあいさつに送られて、彼らを送り出した人々のところへ帰って行った。

- (1) 手紙の朗読に続いて、説教による励ましがあった。
 - ①ユダとシラスは預言者であった。
 - ②彼らは、長い説教によって異邦人信者たちを励まし、力づけた。
- (2) しばらく滞在して後、彼らはエルサレムに戻って行った。
 - ①34節は底本から抜けている。
 - ②「しかし、シラスだけは、引きつづきとどまることにした」(口語訳)
- 3. 35 節

Act 15:35 パウロとバルナバはアンテオケにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のみことばを教え、宣べ伝えた。

- (1) パウロとバルナバは、アンテオケにとどまった。
 - ①この時期は、アンテオケ教会で伝道が大いに進んだ時期である。
 - ②彼ら以外にも、福音を教え、伝える人たちは多くいた。
- (2) パウロとバルナバは、春が来て伝道旅行に出発する準備をしていたはずである。

結論:エルサレム会議の意義

- 1. 聖霊がこの会議を導かれた。
 - (1) 使 15:28

Act 15:28 聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷 も負わせないことを決めました。

- (2) 聖霊によって全会一致に導かれた。
 - ①議事進行の過程で聖霊が介入されたという説明はない。
 - ②しかし、出席者たちは聖霊の導きを強く感じていた。
- (3) ここには、聖霊の導きに関する通常のパターンが見られる。
 - ①ドラマチックな現象が起こっているわけではない。
 - ②出席者たちは、自由に意見を述べ、何が神の御心であるかを探った。
 - ③聖霊に満たされた人たちは、会議の中に聖霊の臨在を感じていた。
 - ④聖霊の導きに従順になれば、意見の一致に至ることを知っていた。
- (4) 問うべき質問
 - ①超自然的な現象がないと、聖霊の導きを認識できないのか。
 - ②人間が準備したり、考えたり、発言したりすると、聖霊の導きを妨げることに なるのか。
 - ③聖霊は、みことばとは無関係に働かれるのか。
- 2. 異邦人伝道を認定したが、そこから来る分裂を回避することができた。
 - (1) この会議以降、教会は2つの分野の伝道に取り組むことになる。
 - ①ユダヤ人伝道
 - ②異邦人伝道
 - (2) 宣教の2つの分野
 - ①国内宣教と海外宣教ではない。
 - ②ユダヤ人伝道と異邦人伝道である。
- 3. 福音の真理が確認され、保持された。
 - (1) 救いは、恵みにより、信仰によって与えられる。
 - ①ユダヤ人も異邦人も、同じ方法によって救われる。
 - (2) この決定は、ユダヤ人信者をラビ的ユダヤ教から切り離した。
 - ①とは言え、彼らには律法を守る自由はある。
 - (3) 律法は、救いのためにも聖化のためにも、必要とはされていない。
 - ①救いと聖化のために必要なのは、恵みと信仰である。

「第二次伝道旅行の始まり」 使徒 15:36~16:5

1. はじめに

- (1) エルサレム会議の決定がアンテオケ教会に伝えられた。
 - ①ユダとシラスが、エルサレム教会の代表として派遣された。
 - ②手紙と彼らの証言によって、異邦人信者たちは大いに励まされた。
 - ③ユダとシラスは、しばらく滞在して後、エルサレムに戻って行った。
- (2) パウロとバルナバは、アンテオケにとどまった。
 - ①この時期は、アンテオケ教会で伝道が大いに進んだと思われる。
 - ②パウロとバルナバ以外にも、みことばを伝える人たちが多くいた。
 - ③パウロとバルナバは、春が来て伝道旅行に出発する準備をしていた。
- (3) 次にルカが記すのは、第二次伝道旅行の様子である。
 - ①この旅行は、約2年半に及ぶものである。

2. アウトライン

- (1) パウロとバルナバの決裂 (36~41節)
- (2) テモテとの出会い (1~3節)
- (3) 教会成長報告(4~5節)

結論

- 1. ユダヤ人信者の割礼
- 2. 教会の自立

第二次伝道旅行の始まりについて学ぶ。

- I. パウロとバルナバの決裂 (36~41節)
 - 1. 36 節

Act 15:36 幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。「先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」

- (1) 代表団がエルサレムに帰還してから、さほど時間が経過していない。
 - ①春の訪れとともに旅行がしやすくなって来た(陸路も海路も)。

- ②パウロからバルナバに、第二次伝道旅行の提案があった。
- ③行き先は、第一次伝道旅行で彼らが設立した諸教会である。 *キプロス島、ガラテヤ地方
- ④訪問の目的は、弟子訓練である。
- ⑤確かめたい点
 - *教会は存続しているか。
 - *ユダヤ人からの迫害の中で、信者たちは信仰を持ち続けているか。
 - *パウロが書き送った手紙(ガラテヤ人への手紙)への反応はどうか。

2. 37~38 節

Act 15:37 ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつも りであった。

Act 15:38 しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。

- (1) 準備段階で、バルナバとパウロの意見の相違が表面化した。
 - ①伝道旅行が始まる前であったのが、よかった。
 - ②ふたりは同じ福音理解を持っていたが、実践の面で意見が異なった。
- (2) バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネを連れて行くつもりでいた。
 - ①その役割は、第一次伝道旅行のときと同じで、助手である。
 - ②マルコはバルナバのいとこであった(214:10)。
 - ③バルナバは、マルコに再度機会を与えようとした。汚名を返上するためである。
- (3) パウロは、マルコを連れて行くことに反対した。
 - ①マルコは、第一次伝道旅行において、パンフリヤで一行から離脱した。
 - ②訳文の比較

「パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者」 (新改訳)

「パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者」(新改訳 2017)

③パウロは、マルコにはまだ伝道旅行の準備ができていないと判断した。

3. 39 節

Act 15:39 そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った。

(1) パウロとバルナバは、長年の協力関係を解消した。

- ①マルコに関する評価は、両者ともに一部正しく、一部間違っている。
- ②しかし、それぞれが、自ら確信する道を行くことになった。
- ③そして、この反目は、2つの伝道チームを生み出すことになった(神の支配)。
- (2) バルナバは、船でキプロスに渡って行った。
 - ①バルナバは、出身地の伝道に戻って行ったのである。
 - ②バルナバとマルコは、39節を最後に使徒の働きからその名が消える。
 - ③この反目の記事は、ルカの記録が真実なものであることを示している。

(3) その後の展開

- ①パウロは、バルナバとの協力関係を解消したが、友人関係は維持した。
- ②1 ¬ J 9:5~6

1Co 9:5 私たちには、ほかの使徒、主の兄弟たち、ケパなどと違って、信者である妻を連れて歩く権利がないのでしょうか。

1Co 9:6 それともまた、私とバルナバだけには、生活のための働きをやめる権利がないのでしょうか。

- ③マルコとの関係も修復された。
- ④2 テモ 4:11

2Ti 4:11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は 私の務めのために役に立つからです。

4. 40~41 節

Act 15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。 Act 15:41 そして、シリヤおよびキリキヤを通り、諸教会を力づけた。

- (1) パウロは、シラスを同労者に選んだ。
 - ①シラスは、エルサレム教会の指導者で預言者であった。
 - ②また、ヘレニストのユダヤ人信者で、ローマの市民権を持っていた。
 - ③シラスの動き
 - *エルサレム→アンテオケ→エルサレム→アンテオケ
 - *約1400キロの旅(東京→大阪→東京→大阪)
 - *シラスは、伝道旅行にふさわしい人物だと言える。
- (2) アンテオケ教会の祝福を受けて、パウロの伝道チームは出発した。
 - ①シリアの諸教会(パウロが、アンテオケ教会にいた間に設立した)
 - ②キリキヤの諸教会(パウロが、タルソにいた間に設立した)

- ③「諸教会を力づけた」。この訪問の第一義的目的は、弟子訓練であった。
- ④バルナバもパウロも、最初は故郷伝道から始めたのである。

Ⅱ. テモテとの出会い(1~3節)

1. 1~2節

Act 16:1 それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、

Act 16:2 ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。

- (1) パウロとシラスは、ガラテヤ地方を訪問した。
 - ①第一次伝道旅行で、パウロとバルナバが教会を設立した地方である。
 - ②デルベ
 - ③ルステラ
- (2) テモテという弟子
 - ①ギリシア語で「ティモセオス」、「神に賞賛された」という意味。
 - ②母はユダヤ人信者、父はギリシア人であった。
 - ③ルステラとイコニオムの諸教会で評判の良い人。
 - ④祖母ロイスと母ユニケより信仰を受け継いだ(2テモ1:5)。
 - ⑤幼い時から聖書教育を受けていた (2 テモ 3:15)。
 - ⑥第一次伝道旅行で、パウロによって救いに導かれたと思われる。
 - (7)当時テモテは、20歳前後であったと思われる。
 - ⑧テモテは、第二次伝道旅行に助手として参加する。*パウロが宣教地を去った後も、働きを続けた(使17:14、1 テサ3:2、6)。*パウロの代理人として諸教会に派遣された(1 コリ4:17、16:10)。
 - ⑨パウロ書簡の6つにおいて、テモテは共同執筆者としてその名を連ねている。*2 コリ、ピリピ、コロサイ、1 テサ、2 テサ、ピレモン
 - ⑩「年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい」(1テモ4:
 - 12)。 当時のテモテは、30代後半から40代前半になっていたと思われる。
 - ⑪パウロの殉教後も、テモテはエペソ教会の初代監督として奉仕した。
 - ⑫その後彼は、ドミティアヌス帝の迫害の時に殉教したと伝えられている。

2. 3節

Act 16:3 パウロは、このテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、 彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることを、みなが知っていたからである。

- (1) パウロは、テモテを助手として連れて行こうとした。
 - ①問題は、彼が割礼を受けていなかったことである。
 - ②ギリシア人の父が、割礼を忌避したのであろう。
 - ③ギリシア人にとって割礼は、肉体を傷つける行為に過ぎない。
 - ④テモテが無割礼のユダヤ人であることは、ユダヤ人の間ではよく知られていた。
- (2) そこでパウロは、テモテに割礼を受けさせた。
 - ①「先ずユダヤ人に、次に異邦人に」を実行するために必要な措置であった。
 - ②テモテにとっては大きな決断である。
 - ③この割礼によって、ユダヤ人たちにつまずきを与えることが回避された。

Ⅲ. 教会成長報告(4~5節)

1. 4節

Act 16:4 さて、彼らは町々を巡回して、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を守らせようと、人々にそれを伝えた。

- (1) 伝道チームは3人体勢になった。
 - ①彼らは町々を巡回した。 *イコニオム、ピシデヤのアンテオケ
- (2) エルサレム会議の決定を記した手紙の内容を教えた。
 - ①恵みと信仰による救い
 - ②4つの禁止令

*ユダヤ人信者と異邦人信者の関係を維持するためのガイドライン

2. 5節

Act 16:5 こうして諸教会は、その信仰を強められ、日ごとに人数を増して行った。

- (1) 5番目の教会成長報告
 - $\textcircled{1}2:47, 6:7, 9:31, 12:24, 16:5, 19:20, 28:30\sim31$
 - ②これは、イスラエルの地の外で起こった教会成長の報告である。

結論

- 1. ユダヤ人信者の割礼
 - (1) テモテに割礼を施したのは、実際的な理由からだけではない。

- (2) そこには、神学的理由がある。
 - ①新しい契約によって、律法を守ることは強制的な命令ではなくなった。
 - ②ライフスタイルとしてユダヤ人が律法を守ることは自由である。
- (3) 割礼は、アブラハム契約のしるしである。
 - ①それは、モーセの律法が与えられる400年も前に決まったことである。
 - ②モーセの律法も割礼を命じたが、その命令は無効になった。
 - ③新しい契約は、アブラハム契約の内容をより確かなものとした。
- (4) 神がアブラハム、イサク、ヤコブと結んだ契約は、今も有効である。
 - ①ユダヤ人信者が割礼を受けるのは、アブラハム契約がそう命じているから。
 - ②ユダヤ性のしるしは、モーセの律法ではなく、割礼である。
- (5) ユダヤ人であるかどうかは、どのようにして判断するのか。
 - ①聖書では、父親がユダヤ人であれば子もユダヤ人である。
 - ②ユダヤ教では、母親がユダヤ人であれば子もユダヤ人である。
 - ③テモテの場合は、異邦人になるかユダヤ人になるか、自分で選ぶことになる。
 - ④ラビであるパウロは、テモテをユダヤ人として認識した。

2. 教会の自立

- (1) パウロが訪問している諸教会は、特定の組織の下に置かれているわけではない。
 - ①エルサレム会議やエルサレム教会が、最高権威だというわけではない。
 - ②エルサレム会議の決議は、命令ではなく、助言である。
 - *エルサレム教会や使徒たちは、諸教会に対して助言者の役割を果たす。
- (2) 地域教会は、それぞれが自立した存在である。

①黙1:13

Rev 1:13 それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。

- ②地域教会は、それぞれが直接キリストにつながっている。
- (3) ピラミッド型の教会組織が危険な理由
 - ①誤った教理が短時間の内に拡散する。
 - *自立した教会は、直接キリストに責任を負う。
 - ②全体主義的政府の支配下に容易に置かれる。
 - *自立した教会は、迫害時には地下に潜ることができる。
 - *中国の公認教会と地下教会の例
 - *ナチスドイツの例
 - *戦時中の日本の例
 - *日本基督教団は、1941年に日本国内のプロテスタント33教派が「合同」

して成立した合同教会で、戦時中はもっぱら戦時体制に貢献させられた。

「マケドニア人の幻」 使徒 16:6~10

1. はじめに

- (1) 第二次伝道旅行が始まった。
 - ①この旅行は、約2年半に及ぶものである。
 - ②パウロとバルナバが、マルコを同行させるかどうかで反目し合った。
 - ③結果的に、2つの伝道チームが誕生した。
 - ④パウロは、ルステラでテモテと出会った。
 - ⑤パウロは、テモテに割礼を受けさせた。
 - ⑥パウロの伝道チームは、3人態勢になった。
- (2) ルカは、異邦人世界におけるキリスト教の急速な拡大を描こうとしている。 (地図表示)
 - ①ローマ帝国内の3つの重要な州(マケドニア、アカヤ、アジア)
 - *エーゲ海の北ーマケドニアーテサロニケ
 - *エーゲ海の西-アカヤ-コリント
 - *エーゲ海の東-アジア-エペソ
 - ②これらの都市はすべて、ヘレニズム文明を特徴としていた。
 - ③使 16:11~19:20 は、パウロのライフワークである。 *第二次伝道旅行と第三次伝道旅行(およそ5年間)
- (3) アウトライン
 - ①アジアでの伝道の禁止(6節)
 - ②ビテニアでの伝道の禁止(7節)
 - ③マケドニア人の幻(8~9節)
 - ④導きの確信(10節)

結論

- 1. 三位一体の神の導き
- 2. 使徒の働きに見られる神の導きの原則

マケドニア人の幻について学ぶ。

I. アジアでの伝道の禁止 (6節)

1. 6 節

Act 16:6 それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。

- (1)「それから」
 - ①これまでは、すでに知っていた諸教会での弟子訓練が行われていた。
 - ②ここから、初めて訪問する場所での伝道が始まる。
 - ③小アジア(現在のトルコ西部)での伝道である。
- (2)「彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、」
 - ①最初は、アジア州の首都エペソに向おうとした。*アジア州は、小アジア西部のことである。
 - ②しかし、西方向への移動が聖霊によって禁じられた。
 - ③ルカは、聖霊がどのようにして働かれたかは記していない。
 - ④一行は、最初の計画を変更せざるを得なくなった。
 - ⑤必要があるということと、それをすべきかどうかということは、別問題である。
 - ⑥この場合は、まだアジアで伝道するタイミングではなかったということである。 *エペソでの伝道は約2年後に実現する。

*使18:19

Act 18:19 彼らがエペソに着くと、パウロはふたりをそこに残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じた。

- (3) 「フルギヤ・ガラテヤの地方を通った」
 - ①これは、ガラテヤ州のフルギア地方のことであろう。
 - ②一行は、進路を北に取った。 *黒海南岸沿いを東に移動し、ビテニア地方に行こうとした。

Ⅱ. ビテニアでの伝道の禁止(7節)

1. 7節

Act 16:7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。

- (1)「ムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、」
 - ①ビテニアは、黒海の南岸地域である。
 - ②ビテニアは、ローマ世界では重要な交通の要衝の地であった。
 - ③パウロの計画は、理にかなったものであった。

(2)「イエスの御霊がそれをお許しにならなかった」

- ①今度も、パウロの計画が途中で止められた。
- ②ここでは、「イエスの御霊」という言葉が出て来る。
 - *これは、珍しい用法である(使徒の働きの中ではここだけに出て来る)。
 - *ロマ8:9では、「キリストの御霊」という言葉が出て来る。
 - *ピリ1:19では、「イエス・キリストの御霊」という言葉が出て来る。
- ③以上の用例が示す神学的意味
 - *イエスは神である。
 - *聖霊は、父と子から発する。
 - *イエスがパウロの伝道を導く主権者である。
- ④どのようにしてかは記録されていないが、彼らは再び聖霊によって禁じられた。
- ⑤ビテニアでの伝道は、後にペテロが行うようになる。

*1ペテ1:1

1Pe 1:1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、

- (3) ここには、人間による綿密な計画と聖霊の導きの絶妙なバランスがある。
 - ①第一次伝道旅行では、パウロの計画した通りに伝道が進められた。
 - ②第二次伝道旅行では、より厳密な聖霊の導きがあった。

Ⅲ. マケドニア人の幻(8~9節)

1. 8節

Act 16:8 それでムシヤを通って、トロアスに下った。

- (1) 先に進むということが、パウロの伝道計画の基本である。
 - ①東に戻るわけにはいかない。
 - ②西に行くことを禁じられた。
 - ③北に行くことも禁じられた。
 - ④唯一開いている方向は、北西である。
- (2) 北西に進むと、トロアスに着く。
 - ①エーゲ海の向こうにギリシアが見える港町である。
 - ②ここは、小アジアとヨーロッパを結ぶ重要な港町である。
 - ③また、エーゲ海と黒海を結ぶ港町でもある。

- ④トロアスは、古代都市トロイから約40キロ南にある。
- ⑤パウロは途方に暮れたことであろう。
 - *これ以上先に進むためには、船に乗るしかない。

2. 9 節

Act 16:9 ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのであった。

- (1) トロアスに着いて間もなく、パウロは幻を見た。
 - ①パウロには自分の計画はなかった。彼は、神の導きを待っていた。
 - ②ある夜、幻の中で、ひとりのマケドニア人がパウロの前に立って懇願した。
 - *「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください」
 - *「私たち」という言葉で、マケドニア人であることが分かった。
 - *これはルカだと考える学者もいるが、単なる推測である。
 - ③マケドニアは、ギリシアの北部、トロアスから真西に位置する地域である。
 - ④マケドニア人は、ヨーロッパ人である。
 - ⑤ヨーロッパは、キリストの福音を必要としていた。

Ⅳ. 導きの確信 (10節)

1. 10 節

Act 16:10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。 神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

- (1)「私たち」という言葉に注目しよう。
 - ①ここから一人称複数形の主語になっている。
 - ②ルカが宣教チームに加わっている。
 - *その経緯については、ルカは書いていない。
 - *ルカの控え目な性格が反映されている。
 - ③「私たち章句」は、16:10~17、20:5~15、21:1~18、27:1~28:16。 *ルカは、目撃者の視点で記録を残している。
 - ④幻を見たのはパウロであるが、宣教チーム全員が神の導きを確信した。
- (2) 彼らはただちにマケドニアに向けて出発した。
 - ①この決断は、教会史の中でも特筆すべきものである。
 - ②福音は、西回りで全世界に伝えられることになった。

結論

- 1. 三位一体の神の導き
 - (1) 使16:6

Act 16:6 それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。

- ①聖霊が、アジアでみことばを語ることを禁じた。
- (2) 使16:7

Act 16:7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。

- ①イエスの御霊が、ビテニアのほうに行くことを禁じた。
- (3) 使16:10

Act 16:10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。 神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

①神が、私たちを導いておられると確信した。

- (4) まとめ
 - ①三位一体の神が、パウロの伝道を導かれた。
 - ②三位一体の神は、聖霊を通してパウロの伝道を導かれた。
- 2. 使徒の働きに見られる神の導きの原則
 - (1) 旧約聖書の聖句による導き

①使徒の補充に関して(使1:20)

Act 1:20 実は詩篇には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』また、『その職は、ほかの人に取らせよ。』

*詩69:25と詩109:8

- (2) 幻による導き
 - ①アナニヤ (使9:10~16)
 - ②コルネリオ (使10:3)
 - ③ペテロ(使10:10~11)
 - ④パウロ(使 16:9~10 と 18:9)

*マケドニア人の幻とコリントでの幻

- (3) 預言者による導き
 - ①アガボによる飢饉の預言(使11:27~30)
 - ②アガボによるパウロ逮捕の預言(使21:10~12)
- (4) 状況による導き

- ①迫害による離散
- ②政治権力による追放や拘束
- ③嵐による船の難破とその後の展開
- (5) 他の信者の助言
 - ①バルナバとパウロのエルサレム教会への派遣
 - ②ユダとシラスのアンテオケ教会への派遣
 - ③テモテの伝道チームへの参加
- (6) 神からの直接的語りかけ
 - ①内的、主観的方法であることが多い。
 - ②使 16:6~8 は、直接的語りかけである可能性が大である。
- (7) 私たちへの適用
 - ①聖書
 - ②状況
 - ③他の信者の助言
 - ④内的確信(平安)
 - ⑤特定の導きの方法を求めるべきではない。

「ピリピでの伝道(1)」 使徒 16:11~15

1. はじめに

- (1) パウロは、トロアスでマケドニア人の幻を見た。
 - ①一行は、ただちにトロアスから船に乗ってマケドニアに向った。
 - ②地図で確認:ローマ帝国内の3つの重要な州(マケドニア、アカヤ、アジア)
 - *エーゲ海の北ーマケドニアーテサロニケ
 - *エーゲ海の西-アカヤ-コリント
 - *エーゲ海の東-アジア-エペソ
 - ③この箇所でのパウロの旅程
 - *トロアス→サモトラケ→ネアポリス→ピリピ
- (2) マケドニア人に関する予備的説明
 - ①彼らは、ひとつの人種グループである。 *ギリシア人との連帯意識が強かった。
 - ②ローマの支配に対しては、最後まで抵抗した。
 - ③福音に対しても頑な反応を示したが、一旦信じると、忠実な信者となった。
 - ④マケドニア州でのパウロの訪問地*ピリピ、テサロニケ、ベレア
- (3) ルカは、ピリピ伝道に最多のスペースを割いている。
 - ①第二次と第三次伝道旅行で訪問したどの町の情報よりも多い。
 - ②ピリピ滞在が短期間であったにもかかわらず、情報量が多い。
 - *ピリピは、パウロが伝道した最初のヨーロッパの都市である。
 - *福音が、アジア大陸からヨーロッパ大陸に伝わったのである。
 - *しかし、当時の人たちには、そういう意識はなかった。
 - *帝国内のアジア州からマケドニア州に福音が伝わったという認識である。
- (4) アウトライン
 - ①パウロの旅程(11節)
 - ②ピリピ到着(12 節)
 - ③安息日の出来事(13節)
 - ④ルデヤの回心 (14~15節)

結論: 伝道の三段跳び

ピリピでの伝道(1)について学ぶ。

- I. パウロの旅程(11節)
 - 1. 11 節

Act 16:11 そこで、私たちはトロアスから船に乗り、サモトラケに直航して、翌日ネアポリスに着いた。

- (1) トロアスからサモトラケヘ
 - ①最初の日に、130キロ以上を航海した。
 - ②サモトラケは、トロアスとネアポリスの中間地点にある島である。
- (2) サモトラケからネアポリスへ
 - ①翌日、サモトラケからネアポリスまで、さらに 130 キロ以上を航海した。
 - ②2 日間で 260 キロを移動するのは、超スピードの旅と言える(順風)。 *これが逆風なら、4 日間かかっていた。
 - ③ネアポリスは、現代のカヴァラという町である。*イタリア南部のナポリと混同してはならない。
- (3) ネアポリスからピリピへ
 - ①ネアポリスは、ピリピの玄関口に当たる港町である。
 - ②ネアポリスからイグナチオ街道を北西に約15キロ進めば、ピリピに着く。

Ⅱ. ピリピ到着(12節)

1. 12 節

Act 16:12 それからピリピに行ったが、ここはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった。私たちはこの町に幾日か滞在した。

- (1) ピリピの歴史
 - ①前 42 年に、この近辺で大戦争が起こった。
 *アントニウスとオクタビアヌス vs. カシウスとブルータス
 *オクタビアヌスは、後のアウグストである。
 - ②この戦争の結果、ローマは共和制から帝政に移行することになった。
- (2)「ここは、マケドニアのこの地方第一の町で、植民都市であった」

- ①マケドニアは、4つの地方に分割されていた。 *マケドニア人が一体化して抵抗することを防ぐための方策である。
 - *ピリピは、その中のひとつの地方における主要都市であった。
- ②前42年の戦争の後、ピリピはローマの「植民都市」(コロニー)となった。
 - *植民都市は、軍事上の拠点となる地に設立された町である。
 - *まさに小ローマがそこに存在したということである。
 - *住民にはローマの市民権が与えられた。
 - *税制上の特権も与えられた。
- ③新約時代におけるピリピの重要性
 - *農業生産
 - *海路と陸路をつなぐ通商上の拠点
 - *金鉱の存在
 - *ローマの植民地としての地位
 - *有名な医学学校の存在
- (3) 使徒の働きに登場するローマの植民都市
 - ①ピリピだけが植民都市と表記されている。*これから起こることをよりよく理解するための情報であろう。
 - ②それ以外に、5都市がある。
 - *ピシデヤのアンテオケ、ルステラ、トロアス *コリント、トレマイ (プトレマイス)
 - ③植民都市に住むのは、ローマに住むのと実質的に同じである。
- (4) パウロの一行は、この町に幾日か滞在した。
 - ①パウロは、安息日になってから行動を開始する。
 - ②先ずユダヤ人に、次に異邦人にという原則を守るためである。
 - ③それまでの数日間、町の調査や生活費稼ぎの仕事をしていたと思われる。

Ⅲ. 安息日の出来事(13節)

1. 13節

Act 16:13 安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰をおろして、集まった女たちに話した。

- (1) 通常は、パウロは安息日に会堂を訪問して、そこで福音を語っていた。
 - ①しかし、ピリピには会堂はなかった。

*これほどのサイズの町に会堂がないのは驚きである。

- ②ユダヤ人の成人男子が10人もいなかったからである。
- (2) そこで4人は、祈り場を探した。
 - ①会堂がない場合、川岸に集まり、会堂での礼拝と同じことをする習慣があった。
 - ②川岸を選ぶ理由は、川が洗礼槽(ミクベ)の役割を果たすからである。 *ユダヤ教のきよめの儀式を行うためである。
 - ③一行は、町から約2.5キロ離れたガンギテス川の川岸に出かけた。
 - ④「祈りの場」とは、小さな建物だった可能性もある。*ユダヤ教では、「祈りの場」とは会堂のことである。
- (3) 男はいなくて、集まっていたのは、女たちだけであった。
 - ①女たちの人数は、記されていない。
 - ②男はいなかったが、パウロは構わずに彼女たちに福音を語った。
 - ③かつてのパリサイ人パウロの姿はない。
 - ④パリサイ人たちはこう祈っていた。
 - *「私は異邦人ではなく、奴隷でもなく、女でもないことを感謝します」

Ⅳ. ルデヤの回心(14~15節)

1. 14 節

Act 16:14 テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。

- (1) 聴衆の中に、ルデヤという女がいた。
 - ①テアテラ市出身のビジネスパーソンである。
 - ②テアテラ市はアジア州の町で、染色業で有名であった。
 - ③特に、紫布が重要な産物であった。
 - *紫布は高価な布であった。
 - *ローマ時代、紫布を着用してよいのは特定の階級の者だけであった。
 - ④ルデヤの顧客は、特権階級の者たちだけであった。
 - ⑤彼女は、神を敬う異邦人であった。
 - *まだ新約聖書の教会(キリストの御からだ)の一員にはなっていない。
 - ⑥彼女は、パウロのメッセージに耳を傾けた。
- (2)「主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた」

- ①彼女の心を開いたのは、主である。 *彼女の心は、すでに用意されていた。
- ②伝道の主体は、復活のキリストである。

2. 15 節

Act 16:15 そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、「私を主に忠 実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください」と言って頼み、強いてそ うさせた。

- (1) その日の内に、彼女は洗礼を受けた。
 - ①回心の直後に洗礼を受けた。 *これは、水に浸かる洗礼である。
 - ②彼女の家族も洗礼を受けた。 *主が心を開いたのは、ルデヤだけでなく家族全員であった。
 - ③家族とは、「オイコス」、英語で「household」である。 *「オイコス」は、しもべたちも含む広い概念である。 *彼女が結婚していたかどうかは、分からない。
 - ④ルデヤの家族でない女たちがどのように反応したかは、書かれていない。
- (2) 彼女は、パウロによって導かれたヨーロッパにおける最初の信者となった。
 - ①彼女は、パウロの一行を自分の家に招待した。 *4人の客をもてなすことができるほどの大きな家であった。
 - ②これは、その家をピリピでの伝道の拠点にするようにという提案である。 *ローマ世界では、宿泊施設は少なく、あったとしても不快なものであった。 *初期のクリスチャンたちは、巡回伝道者を自分の家に迎えた。
 - ③彼女は、パウロの一行を説得した。
 - ④これは、彼女の信仰が本物であることを示す愛の行為である。*彼女は信仰によって救われたので、結果としての行為が伴ったのである。

結論: 伝道の三段跳び

- 1. ホップ:福音は、すべての人に救いをもたらす神の力である。
 - (1) ルカは、ピリピで信者となった3人の人たちを描いている。①ルデヤ、女奴隷、看守
 - (2) 彼らは、身分も境遇も大いに異なるが、同じ福音によって救われた。
 - (3) ロマ1:16

Rom 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

- 2. ステップ:福音を聞く人の心を開くのは、主である。
 - (1) 使徒の働きは、生けるキリストの働きの記録である。
 - (2) パウロは主から委ねられた福音を語ったので、主が働かれた。 ①パウロは、異なった福音を語ったわけではない。
 - (ILL) 宣教学の教授が、使 16:14 を引用した。

Act 16:14 テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。

- 3. ジャンプ:福音を受け入れた人は、天国の市民権を持つようになる。
 - (1) ピリ3:19~20

Php 3:19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

Php 3:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

- (2) ピリピの住民たちの誇りは、ローマの市民権である。
 - ①彼らは、植民地であるピリピに住みながら、ローマの市民権を持っていた。
 - ②彼らの思いは、地上のことだけである。
- (2) クリスチャンの誇りは、天国の市民権である。
 - ①地上に住みながら、天国の市民権を持っている。
 - ②クリスチャンにとっては、地上は天国の植民地である。
 - ③私たちは主イエス・キリストが再臨されるのを待ち望んでいる。

「ピリピでの伝道 (2)」 使徒 16:16~24

1. はじめに

- (1) パウロは、トロアスでマケドニア人の幻を見た。
 - ①一行は、ただちにトロアスから船に乗ってマケドニアに向った。
 - ②パウロの旅程
 - *トロアス→サモトラケ→ネアポリス→ピリピ
 - ③マケドニア州でのパウロの訪問地*ピリピ、テサロニケ、ベレア
- (2) ルカは、ピリピ伝道に最多のスペースを割いている。
 - ①第二次と第三次伝道旅行で訪問したどの町の情報よりも多い。
 - ②ピリピ滞在が短期間であったにもかかわらず、情報量が多い。
 - ③ピリピは、パウロが伝道した最初のヨーロッパの都市である。
 - ④使 16:12

Act 16:12 それからピリピに行ったが、ここはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった。私たちはこの町に幾日か滞在した。

- *植民都市とは、小ローマである。
- *その町の住民は、ローマの市民権を持っていた。

(3) 使16:14

Act 16:14 テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女 の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。

①ルデヤとその家族が福音を信じ、洗礼を受けた。

(4) アウトライン

- ①悪霊との対決(16~17節)
- ②女奴隷の解放(18節)
- ③迫害(19~21節)
- ④投獄(22~24節)

結論: 伝道の底流

ピリピでの伝道(2)について学ぶ。

- Ⅰ. 悪霊との対決(16~17節)
 - 1. 16 節

Act 16:16 私たちが祈り場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった。

- (1) 悪霊との対決のタイミング
 - ①恐らく、ルデヤが救われた安息日の翌週の出来事であろう。
 - ②パウロの一行は、安息日に祈り場に向っていた。
 - *ルデヤと他の婦人たちもいっしょに移動していたと思われる。
 - *目的地は、川岸にある祈り場である。
- (2) 「占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った」
 - ①女奴隷は、「パイディスケイ」である。
 - *使12:13に「ロダという女中」が出て来る。
 - ②この女奴隷は、悪霊の導きによって伝道の邪魔をしようとしたのであろう。
 - *彼女は、悪霊につかれていた(内面が悪霊によって支配されていた)。
 - *これは、並の悪霊ではない。
 - *「占いの霊」は、ギリシア語で「 $\pi \nu \epsilon \tilde{\upsilon} \mu \alpha \pi \dot{\upsilon} \theta \omega \nu$ 」である。
 - *彼女は、「 $\pi \circ \theta \circ \nu$ 」という悪霊につかれていた。
 - ③ $\lceil \pi \circ \theta \omega \nu \mid$ は、「デルフォイの神託」の背後にいる悪霊である。
 - *デルフォイのアポロン神殿は、神託を得られる場所として有名であった。
 - *人々は、戦争、健康問題、投資などについて、神託を求めた。
 - *アポロン神殿の巫女が、恍惚状態になり、「 $\pi \circ \theta \omega \nu$ 」の御告げを聞いた。
 - *「 $\pi \dot{v} \theta \omega \nu$ 」は、神秘的な蛇だと考えられていた。
 - ④この女奴隷は、デルフォイの神託の背後にあるのと同じ悪霊につかれていた。
 - (ILL) 人気占い師・当たる占い師の店デルフィー 恵比寿駅徒歩1分
- (3)「この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった」
 - ①悪霊の力は現実的なものである。
 - ②悪霊は、偶像礼拝者に利益をもたらすことができる。
 - ③主人たちは、この女奴隷を共同所有し、利用していた。
- 2. 17節

Act 16:17 彼女はパウロと私たちのあとについて来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」と叫び続けた。

- (1) 彼女は、パウロとその一行のあとについて来た。 ①伝道の妨害をするためである。
- (2) しかし、彼女が叫んでいる内容は、間違ってはいない。
 - ①この人たちは、いと高き神のしもべたちである。
 - ②救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちである。
 - ③彼女は、この情報をどのようにして手に入れたのか。 *悪霊どもは、超自然的な知識を持っている。
- (3) 女奴隷の存在が、なぜ伝道の妨害になるのか。
 - ①人々は、パウロが伝えるメッセージと占いの霊が関連していると誤解する。
 - ②イエス・キリストの福音の純粋性が、悪霊との関連づけによって汚される。

Ⅱ. 女奴隷の解放(18節)

1. 18 節

Act 16:18 幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け」と言った。すると即座に、霊は出て行った。

- (1)「幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、」
 - ①なぜパウロは、もっと早く対応しなかったのか。
 - ②人の心を開くのは神の御業であるが、悪霊の追い出しもそれと同じである。
 - ③悪霊の追い出しのタイミングが、まだ来ていなかった。
 - ④神はパウロに伝道の機会を与えていた。
 - ⑤悪霊の追い出しが起こると、パウロは町を去らねばならなくなる。
- (2) パウロは悪霊の追い出しを行った。
 - ①直接悪霊に語りかけた。
 - ②イエス・キリストの御名によって命じた。 *イエス・キリストがパウロを通して悪霊を追い出している。
 - ③命令の内容は、「この女から出て行け」である。
 - ④悪霊は即座にその命令に従った。
- (3) この女が信者になったかどうかは、記されていない。
 - ①これほどの体験をしたのだから、信者になったに違いない。

②ルカは、この出来事がどのような結果をもたらしたかに関心がある。

Ⅲ. 迫害 (19~21節)

1. 19~20 節 a

Act 16:19 彼女の主人たちは、もうける望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕ら え、役人たちに訴えるため広場へ引き立てて行った。

Act 16:20a そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。

- (1) 主人たちは激怒した。
 - ①女奴隷が正気に戻ったので、彼女を使って儲けることができなくなった。
 - ②彼らは、パウロとシラスを捕らえて、訴えた。
 - ③これまでの迫害は、ユダヤ人たちから来た。 *原因は、福音宣教に対する反発であった。
 - ④この町にはユダヤ人がいないので、迫害は異邦人から来た。*原因は、経済的損失から来る怒りである。
- (2) 裁判は、広場(アゴラ)で行われた。
 - ①植民都市には、2人の長官が置かれていた。
 - ②「役人」と「長官」は、同一人物である。
 - ③長官は、ギリシア語で「ストゥラテゴイ」。*文語訳では「司」と訳されている。*2人の長官が裁判官であった。
- 2. 20b~21節

Act 16:20b 「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、 Act 16:21 ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」

- (1) 女奴隷の主人たちは、本当の動機を隠して訴えを起している。 ①経済的損失というテーマを愛国心というテーマに切り替えている。
- (2) この訴因には、反ユダヤ的要素が存在している。
 - ①この者たちはユダヤ人である。
 - ②私たちの町をかき乱している。
 - ③ローマの宗教があるのに、非合法な宗教を伝えようとしている。 *ユダヤ教には、公認宗教としての地位が与えられていた。

*しかし、ローマ市民を改宗させることは違法であった。 ④主人たちも、長官たちも、ユダヤ教とキリスト教の区別をつけていない。

IV. 投獄 (22~24節)

1. 22~23 節

Act 16:22 群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、

Act 16:23 何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。

- (1) 植民都市における反ユダヤ的雰囲気
 - ①紀元49年か50年に、クラウデオ帝はすべてのユダヤ人をローマから追放した。
 - ②反ユダヤ的雰囲気は、ここピリピにまで伝わっていた。
 - ③群衆は、理由なくしてふたりに反対して立った。
- (2) 長官は、事実関係を調査しないで、結論を出した。
 - ①むち打ち
 - ②投獄
- (3) かち打ち
 - ①パウロはなぜ自分がローマ市民だと言わなかったのか。*群衆の声に、パウロの言葉がかき消された可能性がある。
 - ②どれくらい激しいむち打ちであったかは、書かれていない。 *何度もむちで打たせたとある。 *パウロは、合計3度のむち打ちを経験している。2コリ11:25。

*****1 テサ2:2

1Th 2:2 ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみに会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。

- (4) 投獄
 - ①「看守には厳重に番をするように命じた」
 - *看守は、命懸けで番をするように命じられた。
- 2. 24 節

Act 16:24 この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。

- (1) 看守は、パウロとシラスを重罪犯のように扱った。
 - ①看守は、通常は退役軍人がなった。
 - *上官の命令に忠実である。
 - *戦闘能力がある。
 - ②看守の地位は、百人隊長クラスと思われる。
- (2)「奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた」
 - ①獄舎の中の一番奥に造られた、窓のない牢である。
 - ②逃亡の危険をなくすために、足かせまで掛けた。

結論: 伝道の底流

- 1. 福音は、すべての人に救いをもたらす神の力である。
 - (1) ルカは、ピリピで信者となった3人の人たちを描いている。
 - ①ルデヤ (上流階級の裕福な婦人)
 - ②女奴隷(下層階級の貧しい女)
 - ③看守(中流階級の代表)
- 2. 福音を聞く人の心を開くのは、主である。
 - (1) 使徒の働きは、生けるキリストの働きの記録である。
- 3. 福音を受け入れた人は、天国の市民権を持つようになる。
 - (1) ピリピの住民たちの誇りは、ローマの市民権である。
 - (2) クリスチャンの誇りは、天国の市民権である。
 - ①地上に住みながら、天国の市民権を持っている。
 - ②クリスチャンにとっては、地上は天国の植民地である。
 - ③私たちは主イエス・キリストが再臨されるのを待ち望んでいる。
- 4. 福音を伝える人は、光の国と闇の国の戦いに巻き込まれている。
 - (1) 神は、神の国を完成させようとして働いておられる。
 - ①神の国の臣民は、聖なる天使たちと救われた人たちである。
 - ②神の働きが前進する方法
 - *神の直接的な介入
 - *天使たちの働き
 - *人間の働き

- (2) 悪魔は、悪魔の国を造ろうとして働いている。
 - ①悪魔の国の臣民は、堕落した天使たちと罪人たちである。
 - ②悪魔の働きが前進する方法
 - *悪魔の直接的な介入
 - *悪霊どもの働き
 - *罪人たちの働き

(3) 光の国と闇の国の衝突

①ルカ4:33~35

Luk 4:33 また、会堂に、汚れた悪霊につかれた人がいて、大声でわめいた。

Luk 4:34 「ああ、ナザレ人のイエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは 私たちを滅ぼしに来たのでしょう。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」

Luk 4:35 イエスは彼をしかって、「黙れ。その人から出て行け」と言われた。するとその悪霊は人々の真ん中で、その人を投げ倒して出て行ったが、その人は別に何の害も受けなかった。

②ルカ8:28

Luk 8:28 彼はイエスを見ると、叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのです。お願いです。どうか私を苦しめないでください。」

③使19:15

Act 19:15 すると悪霊が答えて、「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。 けれどおまえたちは何者だ」と言った。

*ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たち

④ルカ4:18~19

Luk 4:18 「わたしの上に主の御霊がおられる。/主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、 /わたしに油をそそがれたのだから。/主はわたしを遣わされた。/捕らわれ人には赦免を、 /盲人には目の開かれることを告げるために。/しいたげられている人々を自由にし、 Luk 4:19 主の恵みの年を告げ知らせるために。| 「ピリピでの伝道 (3)」 使徒 16:25~40

1. はじめに

- (1) パウロは、トロアスでマケドニア人の幻を見た。
 - ①一行は、ただちにトロアスから船に乗ってマケドニアに向った。
 - ②パウロの旅程

*トロアス→サモトラケ→ネアポリス→ピリピ

- ③マケドニア州でのパウロの訪問地*ピリピ、テサロニケ、ベレア
- (2) ルカは、ピリピ伝道に最多のスペースを割いている。
 - ①第二次と第三次伝道旅行で訪問したどの町の情報よりも多い。
 - ②ピリピは、植民都市であった。 *その町の住民は、ローマの市民権を持っていた。
- (3) これまでの流れ
 - ①ルデヤとその家族が福音を信じ、洗礼を受けた。
 - ②占いの霊につかれた若い女奴隷が解放された。
 - ③使 16:24

Act 16:24 この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。

- ④写真 パウロの牢獄①と②
- (4) アウトライン
 - ①大地震(25~27節)
 - ②看守の救い(28~34節)
 - ③ 牢からの釈放 (35~40節)

結論: 伝道の底流

ピリピでの伝道(3)について学ぶ。

- I. 大地震(25~27節)
 - 1. 25 節

Act 16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。

(1)「真夜中ごろ」

- ①パウロとシラスは、真夜中ごろに起きていた。
- ②背中から血が流れ、体全体に激痛が走っていた。
- ③足かせが体の自由を奪っていた。

(2)「神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、」

- ①奥の牢の暗闇の中から、パウロとシラスの声が聞こえてきた。
- ②祈りの声とヘブル語の歌の朗詠
- ③恐らく、痛みを忘れるための祈りと朗詠であろう。
- ④彼らの霊は打ちひしがれていなかったのである。
- ⑤彼らの信仰は、状況に支配されていなかった。
- ⑥この祈りと賛美を聞いていたのは、神だけではなかった。

(3)「ほかの囚人たちも聞き入っていた」

- ①「エパクロアオマイ」という動詞。朗読や音楽を、喜びながら聞くという意味。
- ②ほかの囚人たちは、祈りと賛美の意味は分からなかったが、聞き入っていた。
- ③彼らは、聞いたことのないヘブル語の祈りと賛美を楽しんでいた。

2. 26 節

Act 16:26 ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みなの鎖が解けてしまった。

- (1) パウロとシラスの祈りと賛美の最中に、突然、地震が起こった。
 - ①古代、この地方での地震は珍しいことではなかった。
 - ②これは、タイミングの奇跡である。
 - ③ペテロは獄舎からの解放を2度経験している。

*使5:18~20、12:3~11

- (2) これは、大地震であった。
 - ①獄舎の土台が揺れ動いた。
 - ②とびら全部があいた。
 - ③囚人たち全員の鎖が解けてしまった。
 - ④しかし、建物が破壊されることはなかった。

3. 27 節

Act 16:27 目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げて

しまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。

- (1) 地震で目をさました看守は、仰天した。
 - ①牢のとびらがあいているのを見た。
 - ②彼は、囚人たちが逃げてしまったと思い込んだ。
- (2) 看守は、剣を抜いて自殺しようとした。
 - ①囚人を逃がした場合は、その囚人が受けるべき刑を受けるのが決まりであった。
 - ②いかなる状況であっても、弁解は許されない。
 - ③看守は、死刑を覚悟した。
 - ④公開処刑の辱めを避けるために、短剣を胸に当てて自殺しようとした。

Ⅱ. 看守の救い(28~34節)

1. 28 節

Act 16:28 そこでパウロは大声で、「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫んだ。

- (1) パウロは、暗闇の中で看守の影を見て、大声で叫んだ。
 - ①自害してはいけない。
 - ②私たちはみなここにいる。
- (2) 他の囚人たちは、なぜ逃げなかったのか。
 - ①ルカは説明していない。
 - ②パウロとシラスが伝える神の力を見て、畏怖の念が生まれたのであろう。
 - ③この中から、ピリピ教会のメンバーが何名か誕生したと思われる。
- 2. 29~30 節

Act 16:29 看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ 伏した。

Act 16:30 そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。

(1) 訳文の比較(29節)

「看守はあかりを取り、駆け込んで来て、」(新改訳)

「看守は明かりを求めてから、牢の中に駆け込み、」(新改訳 2017)

「看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、」(新共同訳)

「獄吏は、あかりを手に入れた上、獄に駆け込んできて、」(口語訳)

「獄守(ひとやもり)、燈火(ともしび)を求め、駈け入りて」(文語訳)

- ①この看守は、監獄の長である。
- ②燈火を持つ部下を奥の牢に入らせた。
- ③おののきながら、パウロとシラスの前にひれ伏した。*これは、礼拝の姿勢である。
- (2) 看守は、ふたりを奥の牢から外に連れ出すと、最も重要な質問をした。
 - ①「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」
 - ②「先生がた」は、「キュリオス」、英語の「Sirs」である。
 - ③ 「**救われる**」とは、死刑を免れるという意味ではない。 *死刑になるようなことは、まだ起こっていない。
 - ④彼は、どのようにしたら神を知ることができるとかと問うている。*彼は、占いの霊につかれた女奴隷が解放されたことを知っていた。*彼は、パウロとシラスが神の使者であることを確信した。*彼は、罪を持ったままで神の前に立ってはならないことを感じた。

3. 31~32 節

Act 16:31 ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。

Act 16:32 そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。

- (1)「主イエスを信じなさい」
 - ①これは、福音のすべてではない。
 - ②その夜、パウロとシラスは、看守とその家の者全部に福音の全貌を語った。 *看守が、家の者全員を呼び寄せたのであろう。
 - ③福音の内容が1コリ15:1~8に記されている。
 - *キリストは私たちの罪のために死なれた。
 - *死んで墓に葬られた。
 - *三日目に甦られた。
- (2)「そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」
 - ①あなたは、主イエスを信じる信仰によって救われます。
 - ②あなたの家族も、主イエスを信じる信仰によって救われます。
 - ③ある人の信仰によって、別の人が救われるという教えはない。
- 3. 33~34 節

Act 16:33 看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、 そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。

Act 16:34 それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

- (1) 看守の応答
 - ①ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。*ふたりが逃げないことを知っていた。
 - ②彼と家の者全部がバプテスマを受けた。 *獄舎の中庭にある井戸の水を使ったと思われる。
- (2) 看守とその家の者たちは、全員、兄弟姉妹となった。
 - ①その後、パウロとシラスを家に招いた。
 - ②傷の治療のため
 - ③食事を提供するため
 - ④この食事は、救われたことを記念する祝会となった。

Ⅲ. 牢からの釈放(35~40節)

1. 35~36 節

Act 16:35 夜が明けると、長官たちは警吏たちを送って、「あの人たちを釈放せよ」と言わせた。

Act 16:36 そこで看守は、この命令をパウロに伝えて、「長官たちが、あなたがたを釈放するようにと、使いをよこしました。どうぞ、ここを出て、ご無事に行ってください」と言った。

- (1) 翌朝、長官たちから派遣された警吏たちがやって来た。
 - ①騒ぎを起した者を懲らしめるというのが、長官たちの意図だったのだろう。
 - ②彼らが派遣したのは、パウロとシラスをむち打った警吏たちである。
 - ③警吏たちは、「**あの人たちを釈放せよ**」という命令を看守に伝えた。
 - ④それを聞いた看守は、大喜びでパウロに、このグッドニュースを伝えた。

2. 37 節

Act 16:37 ところが、パウロは、警吏たちにこう言った。「彼らは、ローマ人である私たちを、取り調べもせずに公衆の前でむち打ち、牢に入れてしまいました。それなのに今になって、ひそかに私たちを送り出そうとするのですか。とんでもない。彼ら自身で出向いて来て、私たちを連れ出すべきです。」

(1) パウロは、ローマの市民権に基づく権利を主張した。

- ①長官たちは、大きな間違いを犯した。
- ②ローマ市民を裁判にかけずに公衆の前で辱め、投獄した。
- ③そこでパウロは、長官たちに2つのことを要求した。
 - *彼ら自身が出向いてきて、公に謝罪すること
 - *彼ら自身が、自分たちを牢から連れ出すこと
- (2) これは、個人的な復讐心から出たことではない。
 - ①ピリピ教会がローマ市民によって立てられたことを印象づけるためである。
- 3. 38~39 節

Act 16:38 警吏たちは、このことばを長官たちに報告した。すると長官たちは、ふたりがローマ人であると聞いて恐れ、

Act 16:39 自分で出向いて来て、わびを言い、ふたりを外に出して、町から立ち去ってくれるように頼んだ。

- (1) 長官たちは、恐れた。
 - ①ふたりの言う通りにした。
 - ②ローマ市民から告訴されたなら、自分たちが罰せられる。
- (2) そして、ふたりに町から立ち去ってくれるように頼んだ。 ①民衆は、依然としてふたりに敵意を抱いている。
- 4. 40 節

Act 16:40 牢を出たふたりは、ルデヤの家に行った。そして兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出て行った。

- (1) パウロとシラスは、町を去るためにルデヤの家に行った。
 - ①そこには、生まれたばかりのピリピ教会が集っていた。
 - ②ふたりは、若い信者の集まりを励ましてから、町を去った。
- (2) 使16:40で、「私たち」から「彼ら」に変わる。
 - ①ルカは、ピリピに留まったのであろう。
 - ②使 20:5~6 で、「私たち」に戻る。 *パウロの一行がピリピを通過する箇所である。

結論: 伝道の底流

- 1. 福音は、すべての人に救いをもたらす神の力である。
 - (1) ルカは、ピリピで信者となった3人の人たちを描いている。
 - ①ルデヤ (上流階級の裕福な婦人)
 - ②女奴隷(下層階級の貧しい女)
 - ③看守(中流階級の代表)
- 2. 福音を聞く人の心を開くのは、主である。
 - (1) 使徒の働きは、生けるキリストの働きの記録である。
- 3. 福音を受け入れた人は、天国の市民権を持つようになる。
 - (1) ピリピの住民たちの誇りは、ローマの市民権である。
 - (2) クリスチャンの誇りは、天国の市民権である。
- 4. 福音を伝える人は、光の国と闇の国の戦いに巻き込まれている。
 - (1) 神は、神の国を完成させようとして働いておられる。
 - (2) 悪魔も、悪魔の国を造ろうとして働いている。
 - (3) 光の国と闇の国の衝突は、聖書全体を貫く一大テーマである。
- 5. 福音を伝える人は、いかなる状況にあっても喜ぶことができる。
 - (1) ピリ3:1
- Php 3:1 最後に、私の兄弟たち。主にあって喜びなさい。前と同じことを書きますが、これは、私には煩わしいことではなく、あなたがたの安全のためにもなることです。
 - (2) パウロは、「主にあって喜びなさい」という命令を、自ら実行した。
 - (3) 獄中での祈りと賛美
 - ①これは、看守とその家族、さらに他の囚人たちを主に導く力となった。
 - ②苦しい時に喜ぶことができるのは、クリスチャンの特徴である。
 - (4) 使16:34

Act 16:34 それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

(5) ピリピ人への手紙は、喜びの書簡である。

「テサロニケでの伝道」 使徒 17:1~10a

- 1. はじめに
 - (1) パウロの旅程
 - ①トロアスで、マケドニア人の幻を見た。
 - ②マケドニア州でのパウロの最初の訪問地は、ピリピであった。
 - ③次に、テサロニケ、ベレアへと進む。
 - ④写真4点
 - *アムピポリス・ストリモン川
 - *テサロニケ・アゴラ①
 - *テサロニケ・アゴラ②
 - *テサロニケ・現在のイグナチオ街道
 - (2) アウトライン
 - ①ピリピからテサロニケへ(1節)
 - ②会堂での伝道 (2~4節)
 - ③ユダヤ人たちの反発 (5~10 節 a)

結論:テサロニケでの伝道から学ぶ教訓

- (1) 力と聖霊と強い確信
- (2) 伝道者の手本
- (3) 真の神への立ち帰り

テサロニケでの伝道について学ぶ。

- I. ピリピからテサロニケへ(1節)
 - 1. 1節

Act 17:1 彼らはアムピポリスとアポロニヤを通って、テサロニケへ行った。そこには、ユダヤ人の会堂があった。

- (1) 一行は、すぐに次の町を目指した。
 - ①体が回復してから活動を再開するのが普通であるが、パウロはそうではない。
 - ②「彼ら」とは、パウロ、シラスの2人であろう。
 - ③テモテは、後からパウロとシラスに合流した可能性が高い。

*使17:14にテモテの名が出て来る。

Act 17:14 そこで兄弟たちは、ただちにパウロを送り出して海べまで行かせたが、シラスとテ

モテはベレヤに踏みとどまった。

④ルカは、ピリピに留まった。

(2) アムピポリス

- ①ピリピから西に約50キロ、イグナチオ街道を移動する。
- ②アムピポリスは大きな町であるが、一行は1泊しただけで、先に進む。
- ③この町には、ユダヤ教の会堂はなかった。

(3) アポロニア

- ①アムピポリスから西南に約40キロ、イグナチオ街道を移動する。
- ②ここでも、一行は一泊しただけであろう。
- ③この町にも、ユダヤ教の会堂はなかった。
- ④ピリピでは異邦人伝道しか行えなかったので、ユダヤ人がいる町を目指した。

(4) テサロニケ

- ①アポロニアから西に約55キロ、イグナチオ街道を移動する。
- ②マケドニア州の首都である。
- ③交通の要衝の町
 - *イグナチオ街道の町であり、主要な港町である(テルマイコス湾)。 *パウロの時代、経済的にも、軍事的にも重要な町であった。
- ④当時の人口は、約20万人と推定される。
 - *大半が土着のギリシア人。
 - *多くのローマ人もいた。
 - *アジア人やユダヤ人もいた。
- ⑤テサロニケは、タルソやアテネと同じように「自由都市」であった。
 - *自治権が与えられている。選挙で選ばれた代表による議会政治。
 - *自分の貨幣を鋳造することができた。
 - *ローマ兵の部隊が駐留していなかった。
- ⑥テサロニケのユダヤ人の会堂は、大きな力を持っていた。
 - *「神を敬う(神を恐れる)異邦人」も多くいた。
- ⑦偶像礼拝がもたらす道徳的堕落が蔓延していた。
 - *ユダヤ教の自制心のある教えに感動する異邦人もいた。

Ⅱ. 会堂での伝道(2~4節)

1. 2節

Act 17:2 パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。

- (1) パウロはすぐに会堂に行った。
 - ①これは、彼の伝道戦略であった。先ずユダヤ人に、次に異邦人に。
 - ②使 13:14~15

Act 13:14 しかし彼らは、ペルガから進んでピシデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂に入って席に着いた。

Act 13:15 律法と預言者の朗読があって後、会堂の管理者たちが、彼らのところに人をやってこう言わせた。「兄弟たち。あなたがたのうちどなたか、この人たちのために奨励のことばがあったら、どうぞお話しください。」

- ③テサロニケでも、パウロは巡回ラビとして語ることを許された。
- (2)「三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた」
 - ①パウロは、3週間にわたりユダヤ人伝道を行った。
 - ②安息日だけでなく、他の日にも、ユダヤ人伝道を行ったことであろう。
 - ③テサロニケでの滞在期間は短かったが、3週間以上は続いた。 *3週目以降は、異邦人伝道を行ったのであろう。
 - ④パウロは、聖書を基に論じた。
 - *ヘブル語聖書の中のメシア預言を解説し、ユダヤ人たちと対話した。 *パウロの伝道の鍵は、旧約聖書の解説によってイエスがメシアであること を証明することである。

2. 3節

Act 17:3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。

- (1) パウロが説明し、論証した内容
 - ①キリストは苦しみを受け、
 - ②死者の中からよみがえらなければならない。
 - ③私が伝えているイエスこそ、キリストである。

3. 4節

Act 17:4 彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。またほかに、神を敬うギリシヤ人が大ぜいおり、貴婦人たちも少なくなかった。

- (1) パウロのメッセージを信じたのは、少数であった。
 - ①ユダヤ人のうちの幾人かは信じ、パウロとシラスに従った。
 - ②その中には、ヤソン、アリスタルコ、セクンドも含まれていた。
 - ③「テサロニケ人アリスタルコとセクンド」(使20:4)
- (2) 異邦人で信じる人が大ぜい起された。
 - ①神を敬うギリシア人が大ぜい信じた。
 - ②貴族階級の婦人たちも、相当数、信じた。 *彼女たちは、ユダヤ教に関心を抱いていた人たちである。
- (3) テサロニケで救われる異邦人の大半が、偶像礼拝の背景を持っていた。

Ⅲ. ユダヤ人たちの反発 (5~10 節 a)

1. 5節

Act 17:5 ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして捜した。

- (1) 神を恐れる異邦人が救われ始めると、ユダヤ人からの迫害が起こる。
 - ①第一次伝道旅行で迫害が起こった町々
*ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ
- (2) 暴動を煽動するのはユダヤ人であるが、実行するのは町のならず者である。
 - ①「広場にたむろしているならず者」(新共同訳)
 - ②彼らは、騒ぎが起こるのを楽しみにしているならず者たちである。
 - ③彼らは、ユダヤ人が煽動すれば、容易に馬鹿騒ぎを始める者たちである。
- (3) 暴徒たちは、ヤソンの家を襲った。
 - ①ヤソンは、新しく信者になったユダヤ人である。
 - ②ヤソンは、パウロとシラスを家に迎え、伝道の拠点を提供していた。
 - ③暴徒たちは、家の扉を破り、中に入ってパウロとシラスを捕らようとした。 *町の法廷に引きずり出すためであった。

2. 6~7節

Act 17:6 しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところ へひっぱって行き、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んで

います。

Act 17:7 それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです。」

- (1) しかし、パウロとシラスを見つけることはできなかった。
 - ①そこで、ヤソンと信者数名を、町の役人たちのところへ引っ張って行った。
 - ②つまり、法廷に引き出したということである。
- (2) 長官と役人の違い
 - ①ピリピでは、長官が登場した。*ギリシア語で「ストラテイゴス」である。
 - ②テサロニケでは、役人が登場している。
 - *ギリシア語で「ポリターケイス」である。
 - *他の文献にこの単語が出て来ないので、ルカの信頼性が疑問視された。
 - *その後、この単語が碑文の中で17個見つかった。
 - ・「ポリターケイス」は、自由都市の役人のタイトルである。
 - *ルカの記録の信憑性が再確認された。
 - *テサロニケでは、役人たち選挙で選ばれ、市議会を構成していた。
- (3) 暴徒たちの訴えの内容
 - ①「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます」
 - *ピリピでは、ローマ市民に対する違法な伝道が訴えの内容であった。
 - *テサロニケでは、それ以上に深刻な罪、反逆罪が訴えの内容である。
 - ・「世界を騒がせて来た」というのは、誇張である。
 - ・しかし、霊的視点から見れば、それは当たっている。
 - *クラウデオ帝によるローマからのユダヤ人追放は、数ヶ月前の出来事。
 - *それゆえ、反逆罪で訴えられるのは、非常に危険なことであった。
 - ②「それをヤソンが家に迎え入れたのです」
 - ③「彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく 行いをしているのです」
 - *暴動の背後に、ユダヤ人がいるのが分かる。
 - *ユダヤ人が暴徒たちに入れ知恵をしている。
 - *確かにパウロは、イエスが王であるというメッセージをしていた。
 - メシアが王として再臨される。
 - ・メシア的王国が設立される。

3. 8~9節

Act 17:8 こうして、それを聞いた群衆と町の役人たちとを不安に陥れた。 Act 17:9 彼らは、ヤソンとそのほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。

- (1) 不安の原因
 - ①この訴えを退けるための証拠がない。
 - ②パウロとシラスが見つからない。
- (2) 役人たちは、冷静に対応した。
 - ①ピリピの長官たちとは異なる。
 - ②彼らは、ヤソンとそのほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。
 - ③パウロとシラスがすぐにテサロニケを去り、二度と戻らないことを約束させた。
 - 4)騒ぎがこのまま収まれ、保証金は返還される。
 - ⑤もし騒ぎが起これば、保証金は没収される。
- 4. 10 節 a

Act 17:10a 兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤへ送り出した。

- (1) パウロとシラスは、どこかに匿われていたのであろう。
 - ①その夜、ふたりは町を出て、ベレアに向った。
 - ②1 テサ2:17

1Th 2:17 兄弟たちよ。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されたので――といっても、顔を見ないだけで、心においてではありませんが、――なおさらのこと、あなたがたの顔を見たいと切に願っていました。

- (2) 教会に対する迫害は、ますます強くなった。
 - ①しかし、テサロニケのクリスチャンたちの信仰は成長した。

結論:テサロニケでの伝道の評価

(1) 力と聖霊と強い確信

①1 テサ1:5a

1Th 1:5a なぜなら、私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ことばだけによったのではなく、力と聖霊と強い確信とによったからです。

- ②神の超自然的な働きによって、彼らは救われた。
- ③これは、彼らの救いが神の計画によるものであることを証明している。
- ④パウロは、自分の体験と重ね合わせている。

(2) 伝道者の手本

①1 テサ1:5b

1Th 1:5b また、私たちがあなたがたのところで、あなたがたのために、どのようにふるまったかは、あなたがたが知っています。

②パウロの伝道を支えたのは、ピリピ教会であった。

*ピリ4:15~16

Php 4:15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおり、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。

Php 4:16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私 の乏しさを補ってくれました。

③パウロは、自給伝道も行った。

*1 テサ2:9

1Th 2:9 兄弟たち。あなたがたは、私たちの労苦と苦闘を覚えているでしょう。私たちはあなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。

*****2 テサ 3:7~8

2Th 3:7 どのように私たちを見ならうべきかは、あなたがた自身が知っているのです。あなたがたのところで、私たちは締まりのないことはしなかったし、

2Th 3:8 人のパンをただで食べることもしませんでした。かえって、あなたがたのだれにも 負担をかけまいとして、昼も夜も労苦しながら働き続けました。

(3) 真の神への立ち帰り

①1 テサ1:9~10

1Th 1:9 私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、

1Th 1:10 また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

- ②「やがて来る御怒り」とは、大患難時代のことである(黙6~19章)。
- ③この希望があったので、彼らは患難の中でも忍耐と確信を失うことがなかった。